



始



73266

247



大日

の

光



金剛峯寺藏 國寶 大日如來

金剛峯寺藏 國寶 大日如來



金剛峯寺藏 國寶 大日如來

京都大覺寺藏
後宇多法皇御宸筆

京都大覺寺藏
後宇多法皇御宸筆

一可真俗同興隆緣起第三

夫以我大日本國者法亦稱号秘教相應
法身之志教我後能益脈之法資傳
天非之書可同或深可伴興替我法斯
廢者皇統去廢台寺興復者皇業業
勢、背牙口意莫悔耳

昭和十二年御下賜勅額

昭和十二年御下賜勅額



昭味十二羊齋不顯像

大日の光 目次

禮 讚 式 一頁

聖 典 篇

護 國 章

一 祕教相應の國 三頁

二 護國の修法 ① 四頁

三 護國の修法 ② 七頁

祕 藏 章

四 心内の經 二頁

五 一眞の覺殿……………二六頁
 六 神通の祕藏……………三一頁
 七 無盡の莊嚴……………三五頁
 八 不二の本尊……………三八頁
 九 十住心……………三九頁
 一〇 道は近きに在り……………四九頁

菩提心章

二 菩提心戒……………五三頁
 三 發菩提心……………六九頁
 三 深信の徳……………九六頁

觀行章

四 月輪觀(二)……………一〇二頁

諷詠章

五 月輪觀(三)……………一〇四頁
 六 阿字觀……………一〇八頁
 七 無相觀……………一一二頁

法語篇

八 十山の喩……………一二七頁
 九 入山の興……………一二九頁
 一〇 山中の樂……………一三三頁
 一一 大仙を慕ふ……………一三五頁
 一二 自心の宮を觀せよ……………一四六頁

一 佛光品……………一五三頁
 二 教藥品……………一七九頁

禮讚式

國	遙	宗	三	三	靜	聖	講	祈	聖
歌	拜	歌	禮	誓	光	讀	讚	願	歌
					念	坐			
					朗				
					訓				

道 聖典解說

道	學	實	迷	明	無	恩	閑	廻	拾
道	相	界	暗	常	德	林	向		
品	品	品	品	品	品	品	品	品	遺
一九九頁	二一九頁	二三七頁	二四九頁	二五五頁	二六三頁	二七九頁	二八七頁	三一頁	三六七頁

遙

國

拜

歌

宗歌いろは歌

大阪音楽学校長 永井幸次作曲

浅^{あさ}き 有^う為^ゐの 我^{わが}世^よ誰^{たれ}ぞ 色^{いろ}は 句^こへ ど

醉^ゑひも 今^け日^ふ越^こえ 常^{つね}なら 散^ちりぬるを

宗歌いろは歌

♩ = 60

The musical score is written in 4/4 time with a tempo of ♩ = 60. It consists of a vocal line and a piano accompaniment. The piano part features a steady eighth-note accompaniment in the left hand and chords in the right hand. The vocal line is in a soprano range and follows the lyrics. The score is divided into four systems, each with a vocal staff and a piano staff. The lyrics are written below the vocal staff in hiragana with furigana above. The piece concludes with a final chord in the piano part.

三

禮

こゝろを淨め、おのれを虚
しうして、至心に三體せよ

恭しく遍照の大日を禮拜し奉る 一禮

恭しく無上の妙法を禮拜し奉る 一禮

恭しく一切の聖者を禮拜し奉る 一禮

三

誓

誓つて總てのものを照しませう

誓つて總てのものを活しませう

誓つて總てのものを拜みませう

靜坐念光

息を調へ心を鎮め、淨く妙なる光明を念じながら、息の自然の出入と共に静かに徐ろに、遍照無礙の靈光を身心全體に呼吸せよ、心おのづから靈光と融合して明朗の一念に安住す

聖訓朗讀

聖訓朗讀の際、初めに心經その他の經典を讀誦するもよし

聖教講讀

聖歌 後宇多天皇御製

大阪音楽学校長 永井幸次謹作

The musical score consists of two systems of staves. The first system has a vocal line with lyrics and a piano accompaniment. The second system continues the vocal line and piano accompaniment. The lyrics are written in katakana and hiragana characters.

あまねく照らす
 日の本の國
 傳へきて
 法のしるしを
 世々たえず

祈

願くは
 萬物ごとく遍照無礙の靈光
 に照され
 萬人もろともに金剛不壞の眞生
 を樂まむ

願

食時の感謝

一粒の米にも萬人の勞苦を想ひ
一滴の水にも天地の恩徳を感謝
し奉る、願くは身を養ひ心を修め
て報恩の道にいそしまむ

頂きます(食前)

御馳走さま(食後)

聖典篇

護

國

章

一 祕教相應の國

法爾の稱號……法爾自然の國號、
無窮の國家なるを表はす。

夫れ以れば我大日本國は、法爾の稱號にして、
祕教相應せる法身の土なり。故に我後血脈を繼ぐの法
資、天祚を傳ふるの君主、盛衰を同うすべく興替を
伴にすべし。我法斷廢せば皇統共に廢せん。吾寺興
復せば皇業安泰ならん、努力、努力、吾が此の意に
背きて悔ること莫れ。

吾寺……京都嵯峨の大覺寺なり。

(後宇多法皇御遺告第三條)

二 護國の修法 (一)

先帝……桓武天皇を指し奉る。

金剛乘の法門……眞言密教なり。

一人三公……皇帝及び大尉、司徒、司空の三長官なり(唐代)。我が國にては太政大臣、左大臣、右大臣を三公と言ふ。

内道場……宮中の修法道場なり。

沙門空海言す。空海幸に先帝の造雨に沐して遠く海西に遊び、儻灌頂道場に入て一百餘部の金剛乗の法門を授けらることを得たり。其の經は則ち佛の心肝、國の靈寶なり。この故に大唐開元よりこのかた一人三公親り灌頂を授けられ、誦持し、觀念す。近くは四海を安んじ、遠くは菩提を求む。宮中には則ち長生殿を捨て、内道場となし、復七日毎に念誦を解する僧等をして持念修行せしむ。城中城外にま

七難……仁王經に説く七難は日月失度難、星宿失度難、災火難、雨水難、惡風難、亢陽難(ひでり)、惡賊難なり。

た鎮國念誦の道場を建つ。佛國の風範も亦復かくの如し。其の將來する所の經法の中に仁王經、守護國界主經、佛母明王經等の念誦の法門あり。佛、國王のために特に此の經を説きたまふ。七難を摧滅し、四時を調和し、國を護り、家を護り、己を安じ、他を安ず。此の道の祕妙の典なり。空海、師の授を得たりと雖も未だ練行すること能はず。伏して望らくは國家の奉爲に諸の弟子等を率ゐて、高雄の山門に於て來月一日より起首して、法力の成就に至るまで且は教へ且は修せん。また望らくは其の中間に於て住

蝗蝻……蝗に蝻(すくもむし)、蝻はかげろふなり。

昊天……天皇を指し奉る。

處を出でず、餘の妨を被らざらんことを。蝗蝻の心體、羊犬の神識なりと雖も、此の思ひ、此の願常に心馬に策つ。況んやまた我を覆ひ、我を載するは仁王の天地なり。目を開き、耳を開くは聖帝の醫王なり。報いんと欲し、答へんと欲するに極りなく、際なし。伏して乞ふ、昊天款誠の心を鑒察したまへ。懇誠の至に任へず。謹んで闕に詣で、表を奉り陳請以聞す。軽く威嚴を觸す。伏して深く戰越す。

沙門空海誠惶誠恐謹言

弘仁元年十月二十七日 沙門空海上表

(性靈集卷四 請奉爲國家修法表)

三 護國の修法 (二)

空海聞く、如來の説法に二種の趣あり。一には淺略趣、二には祕密趣なり。淺略趣と言は諸經の中の長行偈頌これなり。祕密趣とは諸經の中の陀羅尼これなり。淺略趣とは大素本草等の經に病源を論説し、藥性を分別するが如し。陀羅尼の祕法とは方に依て藥を合せ、服食して病を除くが如し。若し病人に對つて方經を披き談ずとも痾を療するに由なし。必ず須く病に當て藥を合せ、方に依て服食すべし。乃ち

長行偈頌……經典の文中散文の部分を長行と云ひ、韻文を偈頌と云ふ。
陀羅尼……深秘なる意義と神秘的な力を有する語、故に翻譯せず原語のまま用ふ。法を憶持して忘れざらしむる故に總持と譯し、佛の眞實境を示す故に眞言と云ひ、神秘的效驗を現はす故に呪と云ひ、迷暗を照破する故に明と云ふ。

大素本草……共に醫書、大素は隋の楊上善撰三十卷、本草は神農作三卷。

沙彌……出家して未だ具足戒を受けざるもの、即ち未だ一人前の僧とならざるものなり。

病患を消除し、性命を保持することを得ん。然るに今講じ奉る所の最勝王經はたゞ其の文を読み、空く其の義を談じて曾て法に依て像を畫き、壇を結んで修行せず。甘露の義を演説することを聞くと雖も、恐くは醍醐の味を嘗ることを闕きてん。伏して乞ふ、今より以後一はら經法に依て經を講じ、七日の間將に解法の僧二七人、沙彌二七人を擇んで別に一室を莊嚴し、諸尊の像を陳列し、供具を奠布して眞言を持誦せんとす。然れば則ち顯密の二趣如來の本意に契ひ、現當の福聚諸尊の悲願を獲てん。

(性靈集卷九 宮中眞言院正月御修法奏狀)

秘藏章

四シン心ナイ内ナイのノ經キヤウ

一切經……佛敎經典の總稱。

一切經イツサイキヤウは名ナは別ベツなれども體タイは一イツなり。皆心ミナシンより生シヤウず。若しモ自心ジシンを持タモたば即ちスナハ此ココの經キヤウを持タモつなり。若しモ文字モンジを持タモたば即ちスナハ彼の經キヤウを持タモつなり。心シンは即ちスナハ是れ内ナイ、文字モンジは是れ外ゲなり。一切イツサイの文字モンジは皆是れ心シンより出イづ。心シンは即ちスナハ是れ本ホン、文字モンジは是れ末マツなり。諸モロクの妄想マウなくんば唯心ユキシン清淨シヤウジヤウなり。經キヤウに云イハく。一切イツサイの業障ゴツシヨウ海カイは皆妄ミナマウ想ザウより生シヤウず。一乘イチジョウとは、唯是れ一心イツシンなり。心シンは即ちスナハ是れ法ホフなり。法ホフは即ちスナハ是れ心シンなり。更に何サラの

人法二空……人空、法空なり。人空とは人は五蘊(要悉)の假りに和合せるものなる故に空なりとする事、法空とはその要素をも空なりとする事。

一切聲塵の萬法……名前を有する一切のもの即ち宇宙間凡てのものなり。

處にか住せん。心を離れて別に法ありといはば即ち執を生ず。心は法に住す。法の想は是れ衆生の見なり。無因に同じ。若し人法二空を了りて心に取捨なければ凡聖善惡一如なり。菩薩は本性は湛然常住にして一切の妄想は本より不生なり、一切聲塵の萬法は本來不生にして説くべきことなしと見る。如とは、即ち自性の別名なり。自性は自性に住して動ぜざるを如と名く。自性は無等々の故に名けて自性とす。菩薩は自性に依て住して妄想を降伏す、自性を見れば妄想自然に生ぜず、心既に不生なれば即ち降伏す。

有爲……因縁によつて造作され生滅變化あるものなり。
無爲……因縁を離れ、作られざるものにて生滅變化なきものなり。

菩薩は煩惱の本より不生なるを見る。境の來り觸るゝに因て遂に善惡の二心を起す。一切の顛倒、貪嗔痴は此に因て生ず。有爲の心は以て無爲の理を表す。衆生の自性は比類すべきなし。等くすべきものなきをもつて名けて如と曰ふ。唯是れ衆生の性なり。性を離れて別の法なし。下智の爲には有爲と説き、上根の爲には無爲と説く。一種の人に兩般あり、迷悟殊なることあればなり。如來は即ち是れ本心なり。一切の妄念は皆本心より生ず。本心は主、妄念は客なり。本心を菩提心と名け、または佛心と名け、また

性相如々……性は本性、自體なり、相はこれが相として外に現せるなり、この性相共にそのまゝ不動の眞理なることを性相如々と云ふ。

は道心と名く。三世の觀を作すとはいへどもまた常に自性を見るにはおよばず。常に自性を見る者は即ち常に佛を見る。一切の萬法は本より動ずる所なし。金剛三昧經に云く、性相如々にして動ずる所なし。菩薩未だ自性を見ざれば生死の苦海に在り。若し善知識に遇うて言説を以て分別すれば如理を顯現す。既に法身を見れば即ち生死の海を度て生ぜず、滅せず、因にあらず、縁にあらず、言説の表に離れて思量の所詮にあらず。法に言説無し。一切の言説は筏の喩の如し。有無俱に二邊なるが故に。二俱に遣れば中

二乘……聲聞、緣覺なり、菩薩に對して小乘を云ふ。

道の樂なりと見る。また云く。相は無相なりと了るが故に、取るべからず、説くべからず、法にあらず、非法にあらず、種々の見を生ずることなかれ。自性無作の故に無爲と名く。二乗の人は自性を見ざれば皆有爲なり。人法二空を悟れば是れ無爲なり。眞如の心の不去、不來、不生、不滅なるは是れ即ち清淨の心を生ずるなり。修行の人若し此の心分を見て修すれば便ち成佛を得。若し妄心によつて修すれば累劫にもまた得ず。大に意を用うべし。一切の萬法は本より自から空寂なり。眞言を不妄と云ひ、實語を

色を滅して而も空……色とは形色あるもの、この形色を否定して空を立てることを云ふ。

不^フ虚^コと云^イふ。終^シ始^ユ變^ン異^ヘなし。佛^{ブツ}性^{シヤウ}本^{ホン}來^{ライ}此^{カク}の如^{ゴト}し。法^{ホフ}には實^{ジツ}もなく虚^コもなし。虚^コ實^{ジツ}の二^ニ迷^{マイ}俱^{トモ}に遣^ヤるが故^{ユエ}に虚^コもなく實^{ジツ}もなしと云^イふ。これは是^コれ眞^{シン}空^{クウ}の理^リなり。二^ニ乘^{ジヨウ}の人^ニは色^{シキ}を滅^{メツ}して而^{シカ}も空^{クウ}なれば猶^{ナホ}是^コれ生^{シヤウ}滅^{メイ}なり。または外^ゲ道^{ダウ}の空^{クウ}と名^ナく。空^{クウ}色^{シキ}俱^{トモ}に遣^{ヤツ}て有^ウ無^ムを立^タてず。語^ゴ嘿^{モク}雙^{サウ}亡^{マウ}し、是^ゼ非^ヒ蕩^{タウ}盡^{ジン}す。心^{シン}の測^{ハカ}る所^{トコロ}にあらず。口^クの宣^ノぶる所^{トコロ}にあらず。有^ウも有^ウなること能^{アタ}はず。無^ムも無^ムなること能^{アタ}はず。偈^ゲに云^{イハ}く。

證^{シヨウ}空^{クウ}を便^{スナハ}ち實^{ジツ}となし
執^{シツ}我^ガを乃^{スナハ}ち虚^コと名^{ナツ}く

非^ヒ空^{クウ}にして亦^{マタ}非^ヒ我^ガなり

誰^{タレ}か有^ウ復^{マタ}誰^{タレ}か無^ムなる

病^{ヤマヒ}に對^{タイ}して應^{マサ}に藥^{クスリ}を施^{ホド}すべし

病^{ヤマヒ}なければ藥^{クスリ}還^{カヘ}つて祛^{ハラ}ふ

常^{ツネ}に二^ニ空^{クウ}の理^リを觀^{クワン}じて

疑^{ウタガヒ}を脱^{ダツ}して無^ム餘^ヨに入^イれ

常^{ツネ}に自^ジ性^{シヤウ}清^{シヤウ}淨^{ジヤウ}なりと見^ミるを名^{ナツ}けて受^{ジュ}持^ヂとし、口^{クチ}に常^{ツネ}に之^{コレ}を記^キするを名^{ナツ}けて讀^{ドク}誦^{ジュ}とす。色^{シキ}すでに空^{クウ}なり。

是^{カク}の如^{ゴト}く了^{サト}れば即^{スナハ}ち色^{シキ}清^{シヤウ}淨^{ジヤウ}なり。即^{スナハ}ち是^コれ色^{シキ}塵^{ジン}三^{サン}昧^{マイ}と名^{ナツ}く。是^コれ無^ム所^{シヨ}住^{ヂュウ}にして其^{ソノ}心^{シン}を生^{シヤウ}ず可^ベし。一^{イツ}切^{サイ}

無^ム餘^ヨ……無^ム餘^ヨ淨^{ジヤウ}染^{ゼン}、最^{サイ}極^{キョク}の覺^{ケツ}の境^{キョウ}地^ヂなり。

般若……真理を透観する智慧、或は又真理(實相)そのものを云ふ。

の萬法は皆心より生ず。心若し生ぜずんば何ぞ萬法あらん。すでに心なくんば何物にか住せん。是の如く心を生ぜば即ち般若と相應す。如來の色身は三十二相を具足して金色の佛なり。問ふ。生を空せば此の身は是れ如來なりや不や。答ふ。しからず。是の色身は如來にあらず。如來は相無けれども色身は形あり。如來は生なけれども色身は生あり。如來は滅なければども色身は滅あり。所以に色身を得ざるを以て如來とす。此の色身は是れ方便應化の化身なり。是れを色身を具足すと名く。即ちこれ妙色身なり。

五蘊……五蘊とも云ふ、色、受、想、行、識なり、人間を成立せしむる要素にして色は身(物質)を作る要素、受以下の四は精神の要素なり。
世諦……俗諦なり、世俗的なる道理、又は見解を云ふ。

妙色身とは、是れ如來なり。即ち是れ法身なり。法身は萬法を含んで不生、不滅、不去、不來なり。故に是れを具足色身と名くと云ふ。涅槃經に云く。佛は即ち是れ法なり、法は即ち是れ佛なりと。釋して曰く。佛身とは即ち法身なり。如來は法として説くべきことなし。是を説法と名くと。釋して曰く。若し五陰の色に對すれば即ち所説あり、若し法身に對すれば法身は萬法を具す。是を説法と名く。更に一の釋あり。世諦に約して而も言は、即ち是れ法身説法なり。法身の説法は唯だ佛と佛とのみ乃し能く之

を知りたまへり。諸の二乗の知見する所にあらず。
 人の心には高下あれども佛の道には高下なし。法身
 は廣大にして虚空に等し。是を大身と名く。法是の
 如くなれども若し大身を現せば、衆生は佛身の頭面
 を見ずして我が心に禮拜を生ぜず。故に權に小身丈
 六の相を示し、衆生の心を明めて、衆生に信受して
 共に菩提の因を結ばしめんと欲ふが故に、小身の事
 相を見しむ。是の如くして理に入らば無漏の智湛々
 たること、海の無言無説にして百川を納るゝに、川
 競ひ注げども不増不減なるが如し。則ち我が法身も

無漏の智……煩惱を離れたる智に
 してこの智によつて眞諦の理を
 知り得。

含靈……靈を含有するもの、即ち
 有情(生物)なり。

また是の如く、廣大無邊なること虚空の如し。無等
 等とは、菩薩は一切の法に生を見ず、死を見ず、彼
 此を見ず。虚空界を盡し乃至十方を合して一相とな
 す。一切の諸佛乃至蠢動含靈を見るに本來無差別な
 り。三世の事状を見るに彈指の如くなる、是を希有
 の法とす。行人行住坐臥一切の時の中に於て常に本
 性を見るを即ち有佛とし、また見佛と名く。若し一
 念も妄心を起さば即ち餓鬼、畜生、地獄を見て三途
 に苦を受く、若し一切衆生の性と自性と別なしと見
 れば、即ち一切の處皆是れ佛なり。金剛とは、梵に

塵勞……煩惱の異名、眞性を汚し
勞せしむる故に云ふ。

は^イず^{ザラ}と曰^イふ。若^モし一^{イツ}國^{コク}の中^{ナカ}に金^{コン}剛^{ガウ}あらば諸^{シヨ}國^{コク}敵^{カチ}は
ず、衆^{シユ}生^{ジャウ}の佛^{フツ}性^{シヤウ}の金^{コン}剛^{ガウ}もまたか^{ゴト}くの如^トし。若^モし深^{フカ}く
佛^{フツ}性^{シヤウ}を見^ミれば一^{イツ}切^{サイ}の邪^{ジャ}見^{ケン}煩^{ボン}惱^{ノウ}共^{トモ}に起^{オコ}らず。所^{シヨ}礙^ゲの處^{トコロ}
一^{イツ}切^{サイ}の塵^{ヂン}勞^{ロウ}一^{イチ}時^ジに摧^{サイ}伏^{フク}す。菩^ボ薩^{サツ}は妄^{マウ}念^{ネン}不^フ生^{シヤウ}なりと知^チ
れば即^{スナハ}ち生^{シヤウ}死^ジの苦^ク海^{カイ}を度^{ワタ}て彼^ヒ岸^{ガン}に到^{イタ}る。如^{ニヨ}來^{ライ}廣^{ヒロ}く方^{ホウ}
便^{ベン}を設^{マウ}くること^{コト}は唯^{タメ}迷^{マイ}人^{ニン}のためなり。迷^{マイ}を以^{モツ}て悟^ゴに
對^{タイ}し、亂^{ラン}を以^{モツ}て靜^{ジヤウ}に對^{タイ}し、慧^エを以^{モツ}て愚^グに對^{タイ}し、善^{ゼン}を
以^{モツ}て惡^{アク}に對^{タイ}して皆^{ミナ}對^{タイ}治^チす。若^モし一^{イツ}法^{ポフ}に住^{ヂユウ}せば即^{スナハ}ち法^{ホフ}
に縛^{バク}せられて生^{シヤウ}死^ジを免^{マシ}れず。是^コの故^エに無^ム所^{シヨ}住^{ヂユウ}に住^{ヂユウ}し
て道^{ダウ}と相^{サウ}應^{オウ}すべし。心^{ココロ}に妄^{マウ}念^{ネン}なくして六^{ロク}塵^{ジン}に染^{ソム}ざら

六塵……色聲香味觸法の六境なり、

これ我等の對境を作るものにしてこの六境(客觀)に迷ひて我等の清淨心が汚される故に六塵と云ふ。

ば佛^{ホトケ}は即^{スナハ}ち常^{ツネ}に心^{ココロ}に在^{キマ}し、萬^{マン}法^{ポフ}の主^{シユ}となるが故^ユに心^{シン}
王^{ワウ}と名^{ナツ}く。法^{ホフ}界^{カイ}を國^{クニ}とし色^{シキ}身^{シン}を舍^{イヘ}となす。今^{イマ}既^{スデ}に人^{ヒト}
の身^{シン}を受け得^エたり、心^{シン}王^{ワウ}中^{チュウ}に處^オるが故^ユに名^{ナツ}けて舍^{イヘ}
す。此^{コレ}を佛^{ホトケ}の止^シ住^{ヂユウ}の處^{トコロ}と名^{ナツ}く。迷^{マヨ}へば即^{スナハ}ち濁^{ヂョク}惡^{アク}の處^{トコロ}、
悟^{サト}れば即^{スナハ}ち清^{シヤウ}淨^{ジヤウ}の處^{トコロ}にして無^ム染^{ゼン}の境^{キヤウ}なり。また淨^{ジヤウ}土^ト
と名^{ナツ}く。衆^{シユ}生^{ジャウ}の自^ジ性^{シヤウ}は本^{モト}より不^フ生^{シヤウ}不^フ滅^{メイ}にして虛^{コウ}空^{クウ}に
同^{オナ}じ。修^{シユ}行^{ギヤウ}の人^{ヒト}須^{ヒト}く本^{ホン}源^{ゲン}を了^{サト}るべし。若^モし本^{ホン}源^{ゲン}を了^{サト}
らざれば法^{ホフ}を學^{マナ}ぶも益^{エキ}無^{ナシ}し。いはゆる本^{ホン}源^{ゲン}とは、自^ジ
性^{シヤウ}清^{シヤウ}淨^{ジヤウ}の心^{シン}なり、本^{モト}より起^キ滅^{メイ}なし。起^キ滅^{メイ}するは即^{スナハ}
ち是^コれ妄^{マウ}心^{ジン}なり。妄^{マウ}心^{ジン}は龜^キ毛^{マウ}兔^ト角^{カク}の如^{ゴト}し。諸^{シヨ}の妄^{マウ}念^{ネン}

十力只是一空……佛に十種の偉大なる習力あり、この十力も要は分別を離れたる一空に歸すとの意。

涅槃……覺の境地、寂滅・圓寂・解脱等と譯す。

は本より無性なりと了るを諸佛と名く。能く心を知らば是れ佛なり。十力只是れ一空にして分別あることなし。修道の人は是の如く恒沙の佛身もまた同じく一體にして實に分別なく、一切の萬像同じく是れ一色なり。色即是空にして一體に同じと見、修行の人は是の如く一切の妄想、顛倒、貪瞋、邪見乃至、煩惱諸の塵勞門は本より不生にして涅槃に同じと見るも、また未だ是とせず。是の如く等の見は是れ識より生ずる所なり。是の識は心より起る。起るものは因縁に屬す。自から識を空せば、境何によつてか有らん。

識已に本より無生なり。何ぞ諸見有らん。佛道遠からず廻心即ち是れなり。

(一切經開題)

(此の文は特に高野山寶龜院藏文
明十六年の寫本を底本とす)

五一眞の覺殿

三趣……地獄、餓鬼、畜生の三惡道なり。

四生……胎卵濕化の四生、衆生はこの何れかによつて出生する。

踏躰……走り行くこと。

牛羊等の車……密教以外の教（顯教）の得果の遅々たるを喻ふ。

三大無數劫……無量の長年月なり。

三途……地獄（火途）、餓鬼（刀途）、畜生（血途）の境界なり。

夫れ衆生狂迷して本宅を知らず、三趣に沈淪し、四生に踏躰す。苦源を知らず、還本に心なし。如來その是の如くなるを愍んで、その歸路を示したまふ。牛羊等の車は紆曲に逐つて徐く進めば必ず三大無數劫を経。神通の寶輅は大空を凌いで速に飛べば一生の間に必ず所詣に至る。人天の二宮は燒燬を免れずと雖も、これを三途に比するに樂にして苦にあらず、故に慈父且く人天乘を與へて彼の極苦を濟ふ。二

羊鹿の車……聲聞（羊）と緣覺（鹿）の教を喻ふ。

金剛界宮……密教の極地たる金剛法界宮、即ち第十秘密莊嚴心なり。

乘の住處は是れ小城なりと雖も、彼の生死に比するに已に火宅を出でたり。故に大覺假に羊鹿の車を説いて暫く化城に息はしむ。菩薩權佛の二宮もまた未だ究極の金剛界宮に到らずと云ふと雖も、前のもろくの住處に比すれば亦是れ大自在安樂無爲なり。故に如來大小の二牛を與へて其の歸舍を示したまふ。如上の二宮は但宅中の荒穢を芟薙して、なほ未だ地中の寶藏を開かず。空く大海の鹹味を嘗めて、孰か龍宮の摩尼を獲ん。淺きより深きに至り、近きより遠きに迄るに轉妙轉樂なりと云ふと雖も、なほ

三秘密……身口意の三業を密教より見て三密と云ふ。この三業には深秘なる意義と不思議の作用ある故に言ふ、又これを顯現するを三密或は三密加持と云ふ。五相成身……通達菩提心、修菩提心、成金剛心、護金剛身、佛身圓滿なり。即ち密教に於て即身成佛の觀法にして始め自身本具の菩提心を觀じ順次自身が佛身と同一となることを五相に分ちて觀するなり。

四種曼荼羅……大曼荼羅、三摩耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅なり。世界一切のもの相をこの四に分つ。これは各々輪圓具足し神祕的相狀なる故曼荼羅と云ふ、佛菩薩について言へば其の相好は大曼、所持物は三曼、眞言は法曼、事業は羯磨なり。一切智々……一切智中最上の智即ち大日如來の眞智なり。横……時間的差別的方面。自性法身……法身(佛身)に四種を立てる中根本の法身、佛の根本本性なり。三身……四種法身中の受用身、變化身、等流身にして根本法身より流現せる身なり。圓々の又の圓……一切の諸尊を圓滿具足せる意。

心王心數……心王は心作用の主體心數は心所のことにして心王に作ふて起る心作用なり。心王を大日如來とし、心數を餘の諸尊とす。

十地……菩薩の位に十階を立て、十地と言ふ。

三密の曼荼羅……三部(佛・蓮華・金剛)の曼荼羅、即ち胎藏界の曼荼羅を云ふ。

四印の神祕……四印とは大智印・三昧耶智印・法智印・羯磨智印にして四智を表はす、金剛界曼荼羅四印會はこれを示す。今は金剛界曼荼羅を云ふ。

薄伽梵摩訶毗盧遮那薩他怛揭多……世尊大日如來と譯す。

是れ蜃樓幻化の行宮にして未だ三秘密、五相成身、

四種曼荼羅、究竟眞實の金剛心殿に入らず。祕號を知

る者は猶鱗角の如く、自心に迷へる者は既に牛毛に

似たり。この故に大慈無量乘を説いて一切智智に入

らしむ。若し豎に論ずれば則ち乘々差別にして淺深

あり、横に觀ずれば則ち智々平等にして一味なり。

これに迷ふ者は藥を以て命を天め、これに達する者

は藥によつて仙を得。祕密曼荼羅金剛心殿の如きに至

つては是れ則ち最極究竟心王の如來大毘盧遮那自性

法身の住處なり。心王の大日は三身を孕んで圓々の

又の圓。心數の曼荼羅は十地を超えて以て本有の又の

本なり。恒沙の眷屬鎮へに自心の宮に住し、無盡の

莊嚴常に本初の殿に遊ぶ。輪王の性、金剛の種に非

ざるよりは誰か能く三密の曼荼羅を見、四印の神祕を

聞かん。塵體の不二に達し、滴心の如一を覺るは謂ゆ

る我が大師薄伽梵摩訶毗盧遮那薩他怛揭多其の人な

り。法界の淨身は月輪に乗じて以て臨み、兩部の衆

聖は蓮臺に並んで以て翊く。心王を庭とすれば則ち

廣博の道場大地輪に周く、心數を境とすれば則ち雲

海の妙供虚空界に満てり。字は法然の文を寫し、義

五大……地水火風空なり。

は無盡の旨を明す。法電、永蟄の佛性を驚し、甘露、樹王の根葉に灑ぐ。覺眼を除蓋に開き、心月を定觀に朗かにす。五大の所造、一心の所遍、鱗角羽毛の郷飛沈走躍の縣、同じく四生の愛網を破つて共に一眞の覺殿に入らん。

(大日經開題)

六神通の祕藏

大毗盧遮那成佛神變加持經とは、これ則ち一切如來根本の祕藏なり。自性法身内證智の境にして人法獨尊、教義離絶せり。この故に佛華法華の牛は顯關に啼いて未だ入らず。羊車鹿車の駕は險路に疲れて以て數退く。時三大を歴、其の道懸かに邈かなり。位五位を盡して其の理彌高し。唯輪王の種性神通に乗じて以て高く臨み、遮那の遺體圓鏡を懸けて以て遠く照すこと有り。こゝを以て大日如來法界に坐し

佛華法華の牛……華嚴及び法華の教なり。

顯關……顯教の關所なり。

羊車鹿車……二七頁註參照。

三大……三大無量劫、無量の長年月なり。

五位……唯識宗にて成佛に至るまでの三大劫の修行中に五段の位階を立つ、即ち資量位、加行位、通達位、修習位、究竟位なり。

佛樹王の牙……牙は牙に同じ。
 等覺……大乘の位階たる五十二位
 中の第五十一、十地の上、妙覺
 (佛)のトにし、菩薩の最上位な
 り。
 聲聞辟支……聲聞と緣覺、共に小
 乘の行者なり。
 聲聞とは佛の教を聞きてさ上る
 もの、緣覺は獨覺とも言ひ、飛花
 落葉等自然界の状を見十二因緣
 を觀じて獨り覺るものなり、辟
 支佛とも云ふ。
 希夷……視れども見えず、聽けど
 も聞えざること。
 勝義等持……勝義(行願)三摩地
 (等地)の菩提心を言ふ、一善
 提心戒參照。

て機を照し、祕宮に住して藥を投ぐ。自性所成の眷
 屬と自受法樂の故に此の三密門を説きたまふ。如來
 の奥地更に廢詮照潤の心地に闢け、佛樹王の牙始め
 て言亡慮絶の空性に生ず。等覺十地恍惚として日眩
 めき、聲聞辟支希夷として望み絶ゆ。所以に藏を樹つ
 るには祕密に名を稱し、乘を彰すには神通に喩を寄
 す。自受法樂を以て修行とし、勝義等持を以て禁戒
 となす。上々決定の信解、空々無著の心智に非ざる
 よりは誰か能く難信の法を信じ、難入の門に入らん。
 若し善男善女あつて纔に此の門に入れば則ち三大僧

五藏……五陰とも云ふ十一九頁註參
 照。
 旃陀……旃陀羅即ち最も下賤の人
 なり、迷妄の凡夫を喻ふ。

等持……禪定の別名なり。
 六境……二二頁六圍註參照。
 四種法身……自性、受用、變化、
 等流の四種法身。二八頁註參照。
 恒沙……恒河の砂、無數なるを喻
 ふ。

祇、一念の阿字に超え、無量の福智三密の金剛に具
 す。八萬の塵勞變じて醍醐と爲り、五蘊の旃陀忽に
 佛惠と爲る。開口發聲の眞言に罪を滅し。舉手動足
 の印契に福を増す。心の起こる所に妙觀自ら生じ、
 意の趣く所等持即ち成ず。貧女の穢庭に忽ち如意幢
 を建て、無明の暗室に乍ち日月の燈を懸ぐ。四種の
 魔軍旗を靡かして面縛し、六境の獵賊黨を率て入附
 す。心王の國土無爲の樂み踵を旋して期すべし。四
 種法身恒沙の徳即身に自ら得。かの身命を曠劫に捨
 て、對治を悠途に修するものと豈に同日に論ずるこ

とを得んや。故に文に云く、顯教に於て修行する者は三大劫を経て難行苦行して或は得、或は得ず。眞言門に菩薩の行を行ずる諸の菩薩は、無量無數劫に積集し修行する所の無量の功德智慧皆悉く成就すと。此の經の大意蓋し此の如し。

(大日經開題)

七 無盡の莊嚴

蝸角の民は羅睺に盲ひ蚊眵の族は大鵬に擗たり。況んや法佛の三密は四種の言語も及ぶこと能はず。曼荼の四身は九種の心識も縁ずることを得ず。この故に名言絶えて機水涸れ、身土隠れて應月没す。大惠懇に請ぜしかども能仁許したまはず。迦葉至て扣きしかども寂尊なほ闕ぢたまふ。海妙は但し月光を見、地藏はほゞ日蔽を讃ず。大衍には其の絶離を稱し、地論には其の不説を顯す。三大域を異にし、一

羅睺……羅睺羅阿修羅なり、帝釋と戦ふとき手をもつて日月を執り其の光を障蔽すと云ふ、日月蝕の神なり。

蚊眵……蚊のまつげに棲む虫なり。

四種の言語……相言説、夢言説、妄執言説、無始言説、如義言説の五種言説の第四、何れも佛の眞實境を説くこと能はず。

九種の心識……六識に末那識、阿羅耶識、一切一心識を加へたるもの、釋摩訶衍論に十識中この九識は眞如を識ること能はず第十の一心識のみこれを識り得ると説く。

大惠……楞伽經第九卷に大惠菩薩に答へて「我が乘の内證智は安聲は境界に非ず」と説かれたりとす。

能仁……釋迦佛なり。

迦葉……涅槃經第三長壽品の迦葉童子をさす。

海妙……大乘同性經の海妙菩薩はたゞ應身を見て法身を見ず。

月光……應身佛なり。
 地藏……地藏菩薩問法身證に説く。
 日觀……衆生本具の佛性を言ふ。
 大行……釋迦河行論なり。
 地論……十地論なり。
 三大……起信論に説く體相用の三大なり、この三大及び一心も共に因分にして不二の域にあらず。
 廢詮の客……法相宗を指す。
 郊に憩ひて牛を放つ……廢詮談旨の郊を最極として甘んじ安んずるなり。
 龜鹿の衰……三論宗を指す。
 期を待つ……三論の清辨菩薩が法相の護法菩薩と空有を論争し彌勒菩薩下生の時決せんとして修羅窟に入り彌勒三會の曉を待つといふ故事を表はす。
 冰照の椎輪……天台宗を指す。天台には氷水をもつて法性と無明との一如を喻へ、照影をもつて境智の不二を喻ふ。又法華を大白牛車に喻ふ故に椎輪と云ふ。
 水波の遊艇……華嚴宗を指す。華嚴には事理無碍法界の義を水波の喻にて説く。
 妙雲開塔 金薩灌頂……龍猛菩薩が南天の鐵塔を開き金剛薩埵より灌頂を受け密教を傳へたるを

心源を別てり。廢詮の客は郊に憩ひて牛を放ち、絶慮の賓は廟に臨んで鶏を待つ。冰照の椎輪は轅を染淨の岳に推き、水波の游艇は楫を風水の海に折る。妙雲開塔の朝、金薩灌頂の時、三密の祕藏は神光を嚇かして大虚を曜し。五智の大我は妙相を湛へて以て靈臺に坐す。十六の輪王は各自國を領し、四攝の幸輔は職を分つて他を利す。恒沙の萬德は森羅として自ら居し。無盡の莊嚴は塵麻も喩にあらず。各大日の垂拱に奉ふること衆星の北辰に共ふが如し。三十七の圓智は微細にして自然に住し。四種の曼荼羅

五智の大我……五智とは法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の五佛智なり、これ即ち五佛にして胎藏界の五佛は本有(因)の五智、金剛界の五佛は修生(果)の五智なり。これを五智の大我と云ふ。
 十六の輪王……金剛界曼荼羅の四方四佛に各々四菩薩の眷屬あり。即ち薩・王・愛・喜等觀門の十六大菩薩なり。
 四攝の宰輔……金剛界曼荼羅の鈎索・繯・鈴の四攝の菩薩なり、佛の衆生教化の徳を表はす。
 三十七の圓智……金剛界に三十七尊あり、これを表はす。
 十八瓊伽……金剛頂經の委會に十八會あり、これをさす。
 不共……他の教に説かざる獨特なるの意。

は本より金剛性に居す。四種法身共に斯の道を陳べ、十八瑜伽同じく此の趣を示す。斯れすなはち此の身を捨てずして頓に佛位を證する不共の佛法、速疾神通の教なり。輪王の種性祕密の加持に非ざるよりは何ぞ能く不思議の法を聞き、難信の教を信ぜん。
 (金剛頂經開題)

八不二の本尊

我が本來自性清淨の心は世間出世間に於て最勝最尊なり、故に本尊と曰ふ。また已成の佛の本來自性清淨の理も世間出世間に於て最勝最尊なり、故に本尊と曰ふ。佛と我と無二無別なり。乃至一切衆生各別の身中の本來自性清淨の理も世間出世間に於て最勝最尊なり。我と佛と及び一切衆生と無二無別なり。是れ三平等の心なり。

(祕藏記)

九十住心

悠悠たり悠悠たり太だ悠悠たり

内外の縑緗千萬の軸あり

杳杳たり杳杳たり甚だ杳杳たり

道を云ひ道を云ふに百種の道あり

書死へ諷死へなましかば本何んがせん

知らじ知らじ吾も知らじ

思ひ思ひ思ひ思ふとも聖も心ことなけん

牛頭草を嘗めて病者を悲み

縑緗……書物のこと。

書死へ諷死へ云云……教法の書もなく、これを讀誦すること無く、くんで何をもつて所依の根本として解脱を得んとの意。

牛頭草を嘗め……牛頭とは神農皇帝なり、神農が草木を嘗めて毒薬を知り藥方を造りしなり。

斷畜車を機つて……斷畜は周公且の異名、周公且は始めて指南車を作り路に迷ふ者を救へり。
三界……有情の住する世界を欲界、色界、無色界の三界に分つ。
四生……二六頁註參照。

十……殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、悭貪、瞋恚、邪見なり。
六度……佛道修行の六の徳目、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧なり。

六行……六行觀なり、三界を九地に分け、下地は塵なり、苦なり、障なり、上地は淨なり、妙なり、離なりと觀じて下地の煩惱を斷じ上地に進み行くなり。
四禪……初禪定乃至四禪定にしてこれを修して色界の四禪天に生ず。
唯蘊に我を遮す……たゞ五蘊のみありて我なしとすること、聲聞の教即ち第四住心を言ふ。
八解六通……八種の解脱と六種の神通なり。
因縁に身を修す……十二因縁を觀ずること、小乘緣覺の教即ち第六住心なり。
種を抜く……無明煩惱の種子を拔除するなり。
無縁に悲を起し……怨親平等の大悲を起すこと、唯識の教即ち第六住心なり。
二障……煩惱障即ち情意的な惑と所知障即ち智的な惑なり。
四智轉得……有漏の八識が轉じて大圓鏡智以下の四智となること。
不生に心を覺り……生滅去來一異斯常の八迷を破り不生不成等を覺ること、三論宗の教、即ち第七住心なり。

斷畜車を機つて迷方を惑む
三界の狂人は狂せることを知らず
四生の盲者は盲なることを識らず
生れ生れ生れ生れて生の始に暗く
死に死に死に死んで死の終に冥し
空華眼を眩かし、龜毛情を迷はして、實我に謬著し、
醉心封執す。渴鹿野馬塵郷に奔り、狂象跳猿識都に
蕩るが如くに至つては、遂んじて十惡心に快うして
て日夜に作り、六度耳に逆うて心に入れず。人を謗
じ、法を謗じて燒種の草を顧みず。酒に耽り、色に

耽て誰か後身の報を覺らん。閻魔獄卒は獄を構へて
罪を斷はり、餓鬼禽獸は口を焰して體に挂く。三界
に輪廻し、四生に踰躡す。大覺の慈父これを觀て何
ぞ默したまはん。この故に種種の藥を設けて種々の
迷を指す。意これに在るか。こゝに三綱五常を修す
れば則ち君臣父子の道、序あつて亂れず。六行四禪
を習へば則ち厭下欣上の觀、勝進して樂を得。唯蘊
に我を遮すれば八解六通あり。因縁に身を修すれば
空智種を抜く。無縁に悲を起し、唯識境を遣れば則
ち二障伏斷し、四智轉得す。不生に心を覺り、獨空

一道を本淨に觀す……一切衆生本來清淨の佛性を具すと云ふ一乘の義を觀すること、天台の教即ち第八住心なり。
法界を初心に念ふ……初發心に法界の圓融無碍を志すること、華嚴の教即ち第九住心なり。

摩訶の惠眼……此言行者は右眼に摩字を觀じ、左眼に訶字を觀す。右眼は日輪にして惠、左眼は月輪にして定なり。
五部……金剛界の五部、佛部・金剛部・寶部・蓮華部・羯磨部なり。
四種の曼荼……八頁註參照。
阿遮……具には阿遮羅那駄、不動尊なり。
多羅……具には多羅羅迦、降三世明王なり。
八供の天女……金剛界曼荼羅の八供養の菩薩、即ち綺鬘歌鈴、香華幢傘なり。
四波の定妃……金剛界曼荼羅の金、寶、法、業の四波羅蜜菩薩なり。
十地……二、にては天台を指す。
三目……華嚴を指す。
齒接……列り交はること。

孝慈心に切なり……慈父慈母の思ひ切なりとの意、佛の衆生を憐れむを喻ふ。

九種の心藥……九種住心即ち願教なり。

哥……父なり。

社……母なり。

摩尼と燕石……摩尼は如意寶珠、燕石は寶珠に似て寶珠に非ざる石なり。

慮絶すれば則ち一心寂靜にして不二無相なり。一道を本淨に觀ずれば觀音熙怡し。法界を初心に念へば普賢微笑したまふ。心外の礦垢こゝに悉く盡き、曼茶の莊嚴このとき漸く開く。摩訶の惠眼は無明の昏夜を破し、日月の定光は有智の薩埵を現す。五部の諸佛は智印を擎げて森羅たり。四種の曼荼は法體に住して駢填たり。阿遮一睨すれば業壽の風定り、多隸三喝すれば無明の波濤れぬ。八供の天女は雲海を妙供に起し、四波の定妃は適悅を法樂に受く。十地も窺窻すること能はず。三自も齒接することを得ず。

秘中の秘、覺中の覺なり。吁吁自寶を知らず。狂迷を覺と謂へり。愚に非ずして何ぞ。孝慈心に切なり。教に非ずんば何ぞ濟はん。藥を投ずること此にあり。服せずんば何ぞ療せん。徒に論じ徒に誦ずれば醫王呵叱したまふ。爾れば乃ち九種の心藥は外塵を拂つて迷を遮し、金剛の一宮は内庫を排いて寶を授く。樂と不樂と、得と不得と自心能くならず。哥に非ず、社に非ず、我心自ら證す。求佛の薩埵知らずんばあるべからず。摩尼と燕石と、驢乳と牛鬪と、察せずんばあるべからず。察せずんばあるべからず。住心

の深淺經論に明かに説けり。具さに列ぬること後の
如し。頰に曰く(中略)

我今詔を蒙つて十住を撰す

頓に三妄を越えて心眞に入らしめん

霧を褰げて光を見るに無盡の寶あり

自他受用日に彌新なり

較祖して伽梵を求む

幾郵してか本床に到る

如來明に此を説きたまへり

十種にして金場に入る

三妄……施細、極細の三妄執なり、眞言行者はこの三妄執を頓速に断するが故に即身成佛す。

自他受用……自受用他受用の法身なり。

較祖……原に出づるに道祖神を祭ること。

伽梵……薄伽梵、即ち佛世尊なり。

郵……驛のこと。

本床……本有本覺の心殿なり。

已に住心の數を聽つ

請ふ彼の名相を開け

心の名は後に明かに列ぬ

諷讀して迷方を悟れ

第一 異生羝羊心

凡夫狂醉して吾が非を悟らず

但だ姪食を念ふこと彼の羝羊の如し

第二 愚童持齋心

外の因縁に由て忽に節食を思ふ

施心萌動して穀の縁に遇ふが如し

異生……凡夫の別名、凡夫は六道に輪廻して種々の生を受ける故に云ふ。

第三嬰童無畏心

外道天に生じて暫く蘇息を得

彼の嬰兒と犢子との母に隨ふが如し

第四唯蘊無我心

唯だ法有を解して我人皆遮す

羊車の三藏悉く此の句に攝す

第五拔業因種心

身を十二に修して無明種を抜く

業生已に除いて無言に果を得

第六他緣大乘心

無縁に悲を起して大悲初めて發る

幻影に心を觀じて唯識境を遮す

第七覺心不生心

八不に戲を絶ち一念に空を觀ずれば

心原空寂にして無相安樂なり

第八如實一道心

一如本淨にして境智俱に融ず

此の心性を知るを號して遮那と曰ふ

第九極無自性心

水は自性なし風に遇うて即ち波たつ

羊車の三藏……小乘聲聞の一切の教を云ふ。三藏とは經律論にして一切の聖典なり。

八不……不生不滅不去不來不一不異不斷不常にして生滅等の八迷の戲論(迷論)を打破するなり。

法界は極に非ず警を蒙つて忽に進む

第十秘密莊嚴心

顯藥塵を拂ひ眞言庫を開く

祕寶忽に陳して萬徳即ち證す

(祕藏寶鑰序)

一〇 道は近きに在り

夫れ佛法遙かにあらず、心中にして即ち近し。眞
 如外にあらず、身を弃て、何くにか求めん。迷悟我
 に在れば發心すれば即ち到る。明暗他にあらざれば
 信修すれば忽ちに證す。哀れなるかな、哀れなるか
 な、長眠の子。苦しいかな、痛いかな、狂酔の人。
 痛狂は酔はざるを笑ひ、酷睡は覺者を嘲ける。曾て
 醫王の薬を訪はずんば、何れの時にか大日の光を見
 ん。翳障の輕重覺悟の遲速のごとくに至ては、機根

醫王の薬……眞言密教を喻ふ。

翳障の輕重……煩惱の厚薄なり。

二教……金胎の二教なり。或は顯教と密教なりとも云ふ。

金蓮……金剛界と胎藏界の兩部なり。

五乘……人乘、天乘、聲聞乘、緣覺等、菩薩乘、即ち顯教の五種の教なり。

幻影の埒に跪つ……五乗の教は究竟に非ずして幻影の如く無自性なるを言ふ、跪は屈む、つまづくなり。

フドウ 不同にして性欲即ち異なり、遂使んじて二教轍を殊んじて手を金蓮の場に分ち、五乘鑿を並べて蹄を幻影の埒に跪つ。其の解毒に随つて藥を得ること即ち別なり。慈父導子の方大綱此にあり。

(般若心經秘鍵序)

菩 提 心 章

一十二部の妙法……一切經を契
 經、重頌、諷偈等の十二種に分
 ち十二部經と云ふ。
 薄伽梵……四四頁註參照。
 五戒……不殺生、不偷盜、不邪淫、
 不妄語、不飲酒。
 六行四禪……四一頁註參照。
 二百五十の戒……出家して比丘と
 なるに受くべき戒に二百五十條
 あり、具足戒と云ふ。
 四念……四念處觀、身受心法の四
 を身は不淨なり、受は苦なり、
 心は無常なり、法は無我なりと
 觀じてこの世界に對する執着を
 破るなり、これ小乘の觀法なり。
 八背……八背捨、三界に於ける貪
 愛を離れる八種の禪觀を云ふ、
 八解脱とも云ふ。
 十二因緣……衆生が三世に涉りて
 輪廻する相狀を十二の因果關係
 に分つて説くもの、無明、行、
 識、名色、六入、觸、受、愛、
 取、有、生、老死なり。

一一 菩提心戒

若し夫れ一千二百の草藥、七十二種の金丹は身病
 を悲んで方を作り、一十二部の妙法、八萬四千の經
 教は心疾を哀んで訓を垂る。身病百種なれば即ち方
 藥一途なること能はず。心疾萬品なれば則ち經教一
 種なることを得ず。この故に我が大師薄伽梵、種々
 の藥を施して種々の病を療したまふ。五常、五戒は即
 ち愚童持齋の妙藥、六行、四禪は則ち嬰童無畏の醍
 醐、二百五十の戒、四念、八背の觀、十二因緣、十

十二頭陀……頭陀とは衣食住に對する貪着を離れる修行なり、これに乞食、樹下坐等の十二種ある故十二頭陀と云ふ。
 法執……人我を作る要素たる五蘊の法に實體ありと執着すること
 一二頁註「人法二空」参照。
 六度……四〇頁註参照。
 四攝……大乘菩薩の衆生攝化の四種の行、布施、愛語、利行、同事（衆生に同化して教化す）なり。
 三祇……三阿僧祇劫なり、無量の長年月。
 四智……四一頁註参照。
 八不八迷……四七頁註参照。
 五句五邊……心と境（主觀客觀）の有無についての五句、これを五の邊見となす。有・無・亦有亦無・非有非無・非々有非々無なり。
 四種の言語……三五頁註参照。
 九種の心量……三五頁註参照。
 覺心不生……四一頁註「不生に心を覺り」参照。
 三諦……天台の教義たる空假中の三諦。
 六即……天台にて菩薩の修行の位に六を立つ、この六は上下の階段あれども其の體不二なる故に即とす、理即、名字即、觀行即、

二頭陀は人我を遮して三昧を證し、法執を帶して涅槃を得。斯れ乃ち聲聞の教藥、緣覺の除病なり。無緣に悲を起し、幻炎に識を觀ず。六度を行とし、四攝に事を作す。三祇に功を積み、四智に果を得。斯を他緣大乘の方法となす。無我を捨て、自在を得、不生を觀じて心性を覺り、八不を揮つて以て八迷を斷じ、五句を擲つて以て五邊を拂ふ。四種の言語は道斷て無爲なり。九種の心量は足絶て寂靜なり。是れ則ち覺心不生の妙術なり。自心を妙蓮に觀じ、境智を照潤に喩ふ。三諦俱に融じ、六即位を表す。是

相似即、分眞即、究竟即なり、理即は唯佛性を具するもの、究竟即は佛果なり。
 帝網……帝釋天の寶網にして重々無盡に交渉關係するを喩ふ。華嚴には法界の無碍涉入を説く。
 六相……華嚴に於いて一切の事物を六の方面より見てその圓融無碍なることを説く、即ち總相別相、同相異相、成相壞相なり。
 十玄……十玄緣起、華嚴にて宇宙一切の事物が互に脈絡關係し相互緣起の關係をなすことを十方面より見て説くもの。
 五教……華嚴宗にては一切佛敎を五教に分つ、即ち小乘教、大乘始教、大乘終教、頓教、圓教なり。
 四車……羊・鹿・牛・大白牛の四車にして聲聞、緣覺、菩薩、一乘の教法を譬ふ。
 三生……華嚴宗に三生成佛を説く見聞生（過去）解行生（現在）證入生（未來）なり、又この三生を一生に經とも説く。
 他受用應化佛……四種法身中他受用身と變化身なり、それら菩薩及び凡大の爲に法を説きたまふ。

れ則ち如實一道心の針灸なり。況んや復法界を帝網に喩へ、心佛を金水に觀ず。六相、十玄其の教義を織り、五教四車其の淺深を簡ぶ。初發に正覺を成じ、三生に佛果を證す。是れ則ち極無自性心の佛果なり。是の如くの妙法は並に皆其の機根に契つて不思議の妙藥なり。自上の諸教は他受用應化佛所説の甘露なり。今授くる所の三昧耶佛戒は、則ちこれ大毘盧遮那自性法身の所説、眞言曼荼羅教の戒なり。若し善男子、善女人、比丘、比丘尼、清信男女等あつて此の乘に入つて修行せんと欲はば、先づ四種の心を發すべし。

一には信心、二には大悲心、三には勝義心、四には
 大菩提心なり。初に信心とは、決定堅固にして退失
 なからんと欲ふが爲の故に此の心を發す。此に十種
 あり。一には澄淨の義、能く心性をして清淨明白な
 らしむるが故に。二には決定の義、能く心性をして
 淳ら堅固に至らしむるが故に。三には歡喜の義、能
 く諸の憂惱を斷除せしむるが故に。四には無厭の義、
 能く懈怠の心を斷除せしむるが故に。五には隨喜の
 義、他の勝行に於て同心を發起するが故に。六には
 尊重の義、諸の有徳に於て輕賤せざるが故に。七に

一乘……聲聞終覺、共に小乘なり。

は隨順の義、見聞する所に隨つて違逆せざるが故に。
 八には讚歎の義、彼の勝行に隨つて心を至して稱歎
 するが故に。九には不壞の義、専ら一心に在つて忘
 失せざるが故に。十には愛樂の義、能く慈悲心を成
 就せしむるが故に。大悲心とは、また行願心とも名
 く。言く外道二乘は此の心を起さず、但菩薩大士の
 み有して能く此の心を起して、法界無縁の一切衆生
 を觀ずること猶し己身の如し。然る所以は善人の用
 心は他を先とし、己を後とす。また三世を達觀するに
 皆是れ我が四恩なり。四恩皆三惡趣に墮して無量の

四恩……父母の恩、國王の恩、衆
 生の恩、三寶の恩なり。
 三惡趣……地獄・餓鬼・畜生なり。

苦を受く。吾は是れ彼が子なり、亦彼が資なり。我に非ずんば誰か能く拔濟せん。是の故に此の大慈大悲の心を發すべし。大慈は能く樂を與へ、大悲は能く苦を抜く。拔苦與樂の本、源を絶んに如かじ。源を絶つの首は法を授けんには若かじ。法藥萬差なりと雖も、前きに説く所の八種の法門是れ彼の本なり。然れども猶機根に隨順するが故に淺深遲速あり。是の如くの諸の法教を簡擇せんと欲ふが爲に、第三の勝義心を發す。また深般若心とも名く。云何が簡擇する。若し上根上智の人あつて、是の如くの法を

深般若……一八頁註「般若」參照。

異生抵羊……以下十住心の項參照。
 十不善……十惡なり。
 三毒……貪瞋痴なり。
 五欲……色聲香味觸の五境に對する欲。

行じて早く自心の本宅に歸らんと欲はゞ、先づ須らく乗の差別を簡知すべし。此の乗の優劣を簡知せんと欲はゞ、是れ凡夫二乗及び十地の菩薩の所知の境界にあらざ。但だ如來の所説に依つて之を知るのみ。如來明に其の差別を説たまふ。是の故に此の龜鏡を攬つて簡得すべし。異生抵羊の凡夫は専ら十不善等の業を造り、三毒五欲の樂に耽つて曾て後身三途の極苦に墮することを知らず。是の故に眞言有智の人、樂著すべからず。愚童持齋の人乗の法は、漸く因果を信じて五常、五戒等を行はずと云ふと雖も、猶是れ

二十八天……佛教に説く天に三界中の欲界に六欲天、色界に十八天、無色界に四天あり、六欲天の最下は四王天にして、無色界の最上天は非想非非想天なり。

三生六十の劫……聲聞は極速の者は三生、極遅の者は六十劫の修行を経て覺ると説く。

七八……聲聞總覺の修行の道に三十七道品あり、その終りのもの七覺支八正道なる故にこの二乗の修行のことを言ふか。

四百の時……總覺は極速の者は四生、極遅の者は百劫の修行を経て覺ると説く。
三大阿僧祇劫……無量の長年月。

劫石……劫の長さことを示す、方四十里の石に天人三年毎に一度來り衣を以つて觸れその石の磨滅する期間を一劫とす。

三世間の身……三世間とは衆生世間、器世間（衆生の住する世界）智正覺世間（佛）にして華嚴宗にてはこの三世間を即ち佛身なりと見て衆生身、國土身、聲聞身乃至法身等の十佛身に配す。五相成身四種曼荼羅……二八頁註参照。

人中の因にして生天の樂を得ず。是の故に樂著すべからず。嬰童無畏の外道生天の乘は、下四王天より上非想に至るまで、二十八天の樂を受くと云ふと雖も、終には人中地獄等に墮して生死を出ることを得ず。是の故に樂著すべからず。唯蘊無我、拔業因種の二種の羊鹿の乘は三界を出づと雖も猶是れ下劣なり。三生六十の劫、七八四百の時、何ぞ其れ吵焉なる。是の故に樂求すべからず。他緣大乘、覺心不生の二種の法門は身命を捨て、布施を行じ、妻子を許して他人に與へ、三大阿僧祇を経て六度萬行を行ず。

劫石高廣にして盡し難く、弱心退き易うして進み難し。十進し九退す。吾もまた何ぞ堪へん。如實一道の心は心垢を拂つて清淨に入り、境智を泯じて如々を證すと云ふと雖も、猶是れ一道清淨の樂にして、未だ金剛の寶藏に入らず。是の故に亦住すべからず、極無自性心は法界を融じて三世間の身を證し、帝網に等うして一大法身を得と云ふと雖も、猶是れ成佛の因、初心の佛なり。五相成身、四種曼荼羅未だ具足すること能はず。是の故に住すべからず。謂く未得を得とし、未到を到と謂へり。是の如く如來の教

勅に依て最上の智慧をもつて乗の差別を簡んで菩提心を發すべし。若し人等あつて是の如くの車に乗じて所行の道に行くをば、未だ最上の淨菩提心と名けず。是の故に眞言門の菩薩は此の諸の住心等を越て菩提心を發し、菩提の行を行すべし。此の乗の差別を知らんが爲に深般若の勝義心を發す。四に菩提心と言ふは、これに二種あり。一には能求の菩提心、二には所求の菩提心なり。能求の心とは、譬へば人あつて善と惡とをなさんと欲せば必ず先づ其の心を標して而うして後に其の行を行ずるが如しと云々。

五障………修造證覺の五の障り、煩惱障・業障・生障・法障・所知障なり。
 三妄………眞言行者が超ゆべき三種の煩惱安心、即ち應妄執・細妄執・極細妄執なり、三劫とも言ふ。

菩提を求むるの人も亦復是の如し。又狂人毒を解して忽に歸宅の心を起し、遊客事畢て乍ちに懷土の思を發すが如く菩提を求むるの心も亦復是の如し。既に知んぬ。狂醉して三界の獄に在り。熟眠して六道の藪に臥せり、何ぞ神通の車を駈て速に本覺莊嚴の床に歸らざらん。此れ則ち能求の心なり。所求の心とは謂ゆる無盡莊嚴金剛界の身是れなり。大毗盧遮那、四種法身、四種曼荼羅は皆是れ一切衆生本來平等にして共に有せり。然りと雖も五障の覆弊を被り、三妄の雲翳に依て覺悟することを得ず。若し能く日

三密の加持……一八頁註参照。

四印の妙用……一九頁註参照。

五部……四二頁註参照、

三部……佛部・蓮華部・金剛部なり、大定・悲・智の三徳の別、この三部に寶部羯磨部を加へて五部とし、金剛界は多く五部、胎藏界は主として三部の建立なり。

月の輪光を觀じ、聲字の眞言を誦じて三密の加持を發し、四印の妙用を揮はゞ、則ち大日の光明、廓として法界に周く、無明の障者忽ちに心海に歸せん。無明忽ち明となり、毒藥乍ちに藥となる。五部三部の尊、森羅として圓に現じ、刹塵海滴の佛、忽然として涌出せん。此の三昧に住するを諸佛祕密の三摩地と名く。諸佛如來此の大悲、勝義、三摩地を以て戒となし、時として暫くも忘るゝこと無し。何が故にか此を以て戒と名くる。戒に二種あり。一には毗奈耶、こゝには調伏と翻ず。二には尸羅、翻じて清

涼寂靜と云ふ。一切衆生を觀るに猶し己身及び四恩の如し。是の故に敢て其の身命を殺害せず。衆生を觀ること猶し己身の如し。故に敢て其の所有の財物を奪盜せず。衆生を觀ること猶し四恩の如し。故に敢て凌辱汗穢せず。衆生を觀ること猶し己身と四恩との如し。故に敢て欺誑せず。衆生を觀ること己身と四恩との如し。故に敢て麤惡の語を以て罵詈せず。衆生を觀ること己身と四恩との如し。故に敢て離間せず。衆生を觀ること己身と四恩との如し。故に敢て所有の財色を貪求せず。衆生を觀ること己身

の如し。故に敢て前人を嗔恚せず。衆生を觀ること
 己身の如し。故に敢て愚痴の心行を起さず。是れ則
 ち大慈悲の行願に由るが故に、自然に十不善の心を
 離る。十不善等を離るゝは即ち是れ調伏の戒なり。
 其の惡心を離るゝに由るが故に、心中清涼寂靜な
 ることを得。是れ則ち尸羅の戒なり。亦是れ饒益有
 情の戒なり。また深般若の妙惠を以て前の九種の住
 心を觀ずるに自性なし。云何が自性なき、謂く冬の
 凍春に遇へば即ち泮ぎ流れ、金石火を得れば即ち消
 鎔するが如く、諸法は皆縁より生じて自性なし。是

の故に異生羝羊の凡夫は一向に惡心なれども善知識
 の教誘に遇ふが故に愚童持齋の心を起す。愚童人乘
 の人因果を信ずるが故に生天護戒の心を起す。嬰童
 無畏の心なり。嬰童無畏の心は殊勝解脱の智を願ふ
 が故に善知識の誘に依て唯蘊無我、拔業因種の二乗
 の心を發す。二乗の人は諸佛の驚誘を蒙るが故に他
 縁大乘の心を起す。他縁大乘の人は寂勝の果を願ふ
 が故に覺心不生の心を起す。覺心不生の人は自性な
 きが故に一道如實の心を起す。一道如實心の人は諸
 佛の驚覺を蒙るが故に極無自性の心を發す。極無自

性の人は究竟最勝金剛の心を願ふが故に秘密莊嚴の心を發す。是れ皆自性なきに由るが故に展轉勝進す。深般若を以て無自性を觀するが故に、自然に一切の惡を離れ、一切の善を修し、自他の衆生を饒益す。即ちこゝに三聚妙戒具足して缺ることなし。秘密の三摩地に住することも亦復是の如し。此の乘に住する者は、此の戒を以て自の身心を檢知し、他の衆生を教化す。即ち是れ秘密三摩耶佛戒なり。

(三摩耶戒序)

三聚妙戒……大乘にて説く三種の戒、攝律儀戒(惡を離る)、攝善法戒(善を行す)、饒益有情戒(衆生を利益す)なり。

一二 發菩提心

阿耨多羅三藐三菩提……無上正等正覺と譯す、佛の覺なり。

菩提心論に云く。我れ今阿耨多羅三藐三菩提を志求して餘果を求めず。誓心決定するが故に魔宮震動し、十方の諸佛皆悉く證知したまふ。乃至、その行相とは三門を以て分別すべし。諸佛菩薩昔因地に在して是の心を發し已つて、勝義・行願・三摩地を戒となし、乃し成佛に至るまで時として暫くも忘るゝことなし。惟眞言法の中のみ即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を説く。諸教の中に於て闕して書せ

三門……次に説く勝義・行願・三摩地の三門なり。

ずと文。心を此の文に懸け、又發菩提心の眞言日別三百遍を誦ぜよ。已上總略の發菩提心なり

一に行願の菩提心

論に云く。我れ當に無餘の有情界を利益し、安樂すべし。十方の含識を觀るになほし己身の如しと。この文の中に二あり。一には利益の菩提心、二には安樂の菩提心なり。

一に利益の菩提心とは、凡そ心あらん者は皆本覺の大日如來、阿闍如來、寶生如來、彌陀如來、不空如來等の五智、三十七智、一百八智、乃至十佛刹微

三十七智……金剛界曼荼羅三十七尊の内證智なり。
百八智……同じく百八尊の内證智なり。

智佛理佛……金剛界曼荼羅の諸尊は智佛にして胎藏界は理佛なり。

如來藏……衆生の本性に藏せらるる佛性を言ふ。

塵數等の無邊の智佛、無數の理佛を具して一衆生として成佛せざるものなし。悉く勸めて當に菩提心を發さしむべし。故に論に云く。應に知るべし、一切有情は皆如來藏の性を含して皆無上菩提に安住するに堪任せり。この故に二乗の法を以て得度せしめずと文。

二に安樂の菩提心とは、一切有情は皆成佛の器なり。有識有情は當生の諸佛、遮那釋迦は已成の如來なり。有情を惱す者は即ち如來を惱すなり。衆生を輕んずる者は諸佛を輕んずるに擬す。有情を過めて

苦心を生ぜしむること勿れ。故に論に云く。既に一切衆生は畢竟じて成佛すと知るが故に敢て輕慢せず。乃至、衆生の願に随つて之れに給付せよ。乃至、身命をも恠惜せずと文。

二に勝義の菩提心

論に云く。一切の法は自性無しと觀すと文。所謂一切の法とは此れに九種の心法あり、異生羝羊心、乃至、極無自性心なり。謂く凡夫を聖者に望め、菩薩を佛陀に比するに轉々相望して各々無自性なり。故に大師の云はく。九種住心無自性、轉深轉妙皆是

因とは、この二句は、前に説く所の九種の心は皆至極の佛果にあらずと遮す。九種といふは異生羝羊心、乃至、極無自性心是れなり。中に就いて初の一是凡夫一向に惡を行じて微少の善をも修せざることを擧げ、次の一は人乘を顯し、次の一は天乘を表す。即ちこれ外道なり。下下界を厭ひ、上生天を欣つて解脱を願樂へども遂に地獄に墮す。已上の三心は皆是れ世間の心なり。未だ出世と名けず。第四の唯蘊已後は聖果を得と名く。出世の心の中に唯蘊と拔業とはこれ小乗の教、他縁以後は大乗の心なり。大乘に

おいて前の二は菩薩乘、後の二は佛乘なり。かくの如くの乗々、自乗には佛の名を得れども後に望むれば戲論と作る。前々は皆不住なり。故に無自性と名く。後々は悉く果にあらざる故に皆是因と云ふなり。

三に三摩地の菩提心

夫れ應化の如來は祕して談ぜず。傳法の菩薩は置いて論ぜず。自性法身大日如來、自眷屬とともに、各々三密を説いて自受法樂したまふ。甘露醍醐なり。これを祕密莊嚴心と名くるなり。小機の者のためには一字をも説くこと勿れ。若し疑心を作さば無間

應化の如來……衆生教化の爲に法身より化現せる佛、釋迦佛の如きなり。

無間の人……無間地獄に墮ちる人なり。

の人とならん。信男信女當に此の法を學ぶべし。

普賢大菩提心……衆生本具の淨菩提心なり、普賢菩薩は菩提心の徳を司る故に言ふ。本有の薩埵……本來佛性を具する菩薩なり。

祕密瑜伽……深秘なる觀行なり、瑜伽とは相應と譯し觀念觀行により真理と相應し本尊と一體となること、密教は特に瑜伽を説く宗なる故に密教の事と云ふ。故に祕密瑜伽とは又密教のことなり。

論に云く。何んが能く無上菩提を證する。當に知るべし。法爾に應に普賢大菩提心に住すべし。一切衆生は本有の薩埵なれども貪・瞋・痴の煩惱のために縛せらるゝが故に、諸佛の大悲、善巧智を以て此の甚深祕密瑜伽を説いて、修行者をして内心の中に於て、日月輪を觀ぜしむ。此の觀を作すに由つて本心を照見するに湛然として清淨なり。乃至、我れ自心を見るに形月輪の如しと文。謂く心月の如きは義無量なりと雖も且く十種を擧げて觀心の要となさん。

心月圓滿の觀

種智……一切種智、佛の智なり、一切種々の法を知る故に云ふ。

月の圓滿なるが如く自心も闕くることなし
萬徳を具足し種智を圓滿せり
月の圓形を見て心の滿體を觀ぜよ
福智を圓滿せる雙圓の性佛なり

心月潔白の觀

白法……白淨の法即ち善法なり。
黒法……黒穢の法即ち惡法なり。

月の潔白なるが如く自心も白法なり
永く黒法を離れて常に白善を具す
月の白色を見て心の白質を觀ぜよ
自性淨白にして性徳の本源なり

心月清淨の觀

月の清淨なるが如く自心も無垢なり
自性清淨にして無貪無染なり
月の淨徹を見て心の淨性を觀ぜよ
本より貪染なし元是れ淨佛なり

心月清涼の觀

月の清涼なるが如く自心も熱を離れたり
慈悲の水を灑いて嗔恚の火を消せ
月の涼光に觸れて心の慈水を澄まさば
無量の悲焰一時に消滅す

心月明照の觀

月の明照なるが如く自心も照朗なり
本より無明を離れて常に是れ遮那なり
心月臆に澄む五障何ぞ闇からん
圓鏡意を瑩いて光明遍く照す

心月獨尊の觀

月の獨一なるが如く自心も獨尊なり
諸佛の尊ぶ所萬法の歸する所なり
心殿は比ひ無き心王の如來
識都に並び居するは心數の眷屬なり

九障……六三頁註參照。

心王心數……二九頁註參照。

心月中道の觀

月の中に處するが如く自心も邊を離れたり
恒に中道を極めて永く邊執を越えたり
顯教の邊を離れて眞言の中に住す
應佛の國を過ぎて法身の宮に入る

心月速疾の觀

月の遶からざるが如く自心も速疾なり
祕密の輪を轉じて刹那に惑を斷ず
心を淨土に懸くれば十方遠からず
神通の車に乗じて須臾に成佛す

心月巡轉の觀

月の巡轉するが如く自心も無窮なり

心水に還り入て利物の波を起す

正法の輪を轉じて邪迷の闇を破り

萬德無窮にして二利斷ゆることなし

心月普現の觀

月の普く現ずるが如く自心も遍く靜なり

化縁水靜なれば普く萬機に浮ぶ

一體を分たずして九界の前に現じ

多身を假らずして十方の土に臨む

二利……自利利他なり。

九界……十界の中佛界を除ける他の九、即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・聲聞・緣覺・菩薩界なり。

已上月輪云々……已上月輪の十義了り、已下阿字の十義なり。

一肘……肘の端より中指の端までの長さ。

素光の色……白い光の色。

禪智……兩手の拇指、右は禪にして左は智なり。

金剛縛……外縛のこと、即ち兩手の指を外にして縛せる印なり。

已上月輪、已下阿字

八葉の白蓮一肘の間に

阿字素光の色を炳現す

禪智俱に金剛縛に入れて

如來の寂靜智を召入す

阿字の字義もまた無量なりと雖も、且く十義を擧げ

て以て無盡を顯す

阿字平等の義

阿字は諸法に高下有ることなし

體本より平等にして差別なきが故に

闡提……一闡提即ち成佛の性なきもの、不信、斷善根等と譯す、但し一乘教にては闡提の成佛をみとむ。

心體も本より等うして凡聖の異なし

佛性闡提一如平等なり

阿字無別の義

阿字は諸法無分別の義なり

自體清淨にして垢染無きが故に

心體も本より離れて煩惱の染無し

本來清淨にして一味一色なり

阿字無生死の義

阿字は諸法無生死の義なり

有分別無分別を離るゝが故に

心體も本生なれば分段の分別と

變易の無分と相寂常住なり

阿字本不生の義

阿字は諸法本不生の義なり

妄念不生なれば淨法も不生なり

心體も無爲にして永く起滅せず

心海常住にしてすべて波浪なし

阿字無始の義

阿字は諸法に終盡あること無し

本來本有にして初起なきが故に

本生……本不生、本來不生不滅なること。
分段變易……二種の生死なり、分段生死とは壽命形態等に區分のある生死にして凡夫等の普通の生死、變易生死とは形態壽命等の上に見えざる微細不思議なる生死にして聖者の受くる生死なり。

心體も本有にして無始無終なり
法界に周遍して常住一際なり

阿字無住の義

阿字は諸法無住處の義なり
生死にも住せず涅槃にも留まることなし
心體も不住なれば染淨不定なり
遍く法界に應じて至らずといふ所なし

阿字無量の義

阿字は諸法に限量有ることなし
萬法唯阿なれば阿字も無量なり

我が心も法に遍すれば心即ち諸法なり
諸法無量なれば心もまた無量なり

阿字無我の義

阿字は諸法二我無きの義なり
人我不生なれば法我即ち空なり
我が心即ち阿なれば衆生も亦阿なり
阿阿にして無我なれば一阿にして眞我なり

阿字無爲の義

阿字は諸法無爲常住なり
有爲の萬法皆阿字に歸す

二我……人我法我なり、人我とは
五蘊の和合によつてなれる人を
實體ありとすること、法我とは
人我は實體なしとするもその要
素たる五蘊は實體ありとするこ
と。

無爲……因縁によつて作られるも
のに非ずして常住不變のもの。
覺の境地、眞如、虚空の如きは
無爲なり。
有爲の萬法……因縁によつて作ら
れ生滅變化ある一切の事象なり。

一、**我**を離れて妄の有爲を表すことなし
三毒に即して眞の無爲を顯すことあり

阿字無闇の義

我字は諸法闇冥無きの義なり

體無明を離れて常に明了なるが故に

心無明を離れたりこれを大日と名く

生死の長夜この時永に曉けぬ

問ふ。阿字と心月と同なりや、異なりや。

答ふ。同にして即異、異にして即同なり。同に非ず

異に非ず亦は同亦是異なり。十六重の義、今且く之を略す是

白珂……白色の珊瑚なり。

れ即ち菩提心の體性なり。

問ふ。正しく之を觀ずるの方云何。答ふ。若は**我**

若しは月、之を圖造せよ。その形、白珂の色に染め

て微妙嚴麗にして世に比類無し、持して淨處に懸け

よ。去ること四尺許り、向つて端坐し、眼を開くに

は下より上へ、眼を閉づるには上より下へ、出入の

息に隨つて之を觀じ、之を見よ。此の如く目を積む

に初心には見難けれども、後心には見易し。眼を

閉ぢて向はざるに漸く顯れ見え去る。若し顯るれば

圖造の月と**我**とに向ふこと勿れ。唯眼に見ゆるを縁

權教……方便の教、密教以外の教をさす。

三毒……五九頁註参照。
十惡……四〇頁註参照。
四重……四重罪、小乘の戒にては經道安を四重とす。
五逆……五逆罪、即ち殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧なり。
瑜伽の密行……七五頁「秘密瑜伽」の註参照。
一百六十の究執……眞言行者の超すべき安心は百六十心あり、す、貪瞋癡慢疑の五根本煩惱を五度倍數して得る。
三祇……六〇頁註参照。
六度……四〇頁註参照。

ぜよ。文に云く。此の觀は萬行の尊主、諸定の帝王、出凡の正門、入聖の直道なり。疑謗の逆縁、猶權教の戒行に優れり。信歸の順因、誰か顯乘の智觀に比せん。何に況んや信修するをや。何に況んや深行するをや。三毒十惡は變じて曼荼の功德となり、四重五逆は轉じて瑜伽の密行に歸し、一百六十の妄執は斷道を假らずして自ら絶え、八萬四千の煩惱は對治を待つこと無うして忽に消えぬ。三祇の長劫もこれを半念に縮め、六度の廣行もこれを一觀に攝む。煩惱生死の睡暗今永く斷え、菩提涅槃の覺月斯に始め

密嚴……三密の無盡の徳を以つて莊嚴されるなり。

文に云く……大乗本生心地觀經卷八發菩提心品。

五種の三摩地門……五種の三昧即ち定なり、前記の經にその内容を説く。

て彰る。淺觀小行の人はこの身を捨てずして轉じて極樂の上品上生を得、深修大勤の類は彼の心を改めずして變じて密嚴の大明大日と成る、修し易く證し易きの道、既に斯の行に越ゆることなし。値ひ難く聞き難きの法、豈に此の門を過ぐることあらんや。文に云く。此の觀を修する者は起す所の五逆、四重十惡、及び一闡提、是の如きの罪障悉く皆消滅して、即ち五種の三摩地門を獲。云何が五となす。一には利那三昧。二には微塵三昧。三には白縷三昧。四には起伏三昧。五には安住三昧なりと云。深義更に問へ

論に云く。若し纔に見る者をば則ち眞勝義諦を見る
 と名け、若し常に見る者は菩薩の初地に入ると云云。
 問ふ。已に引字と心月とは即ち菩提心の體性なる
 ことを知んぬ。未だ知らず。此の心に幾くの差別あ
 りや。答ふ。廣ずれば則ち無邊なり。略すれば二に
 過ぎず。一には能求の菩提心、二には所求の菩提心
 なり。能求の道心とは、大日經に云く。自心に菩提
 と及び一切智とを尋求すべし、何を以ての故に、本性
 清淨なるが故にと云云。菩提心論に云く、我れ今阿耨
 多羅三藐三菩提を志求して餘果を求めずと云云。大師

の文に云く。能求の心とは譬へば人あつて善と惡と
 をなさんと欲するに必ず先づ其の心を標してしかう
 して後に其の行を行ずるが如く、菩提を求むる人も
 亦復かくの如し。既に狂醉して三界の獄に在り、熟
 眠して六道の藪に臥すことを知んぬ。何ぞ神通の車
 を駈つて速に本覺莊嚴の床に歸らざらんと文。早く
 無明の眠を覺まして五佛の眼を開き、速に煩惱の醉
 を治して四曼の都に遊ばん。所求の道心とは、大師
 の云く、所求の心とは所謂無盡莊嚴金剛界の身是れ
 なり。大毘盧遮那四種法身、四種曼荼羅、皆是れ一

五佛……金剛界にては大日・阿闍
 寶生・阿彌陀(又は觀自在王と名
 く)・不空成就(又は觀自在王と名
 なく)、胎藏界にては大日・寶體・
 開敷華王・無量壽・天鼓雷音な
 り。金胎にて名異なるも同體な
 り、この五佛は一切菩薩明王等
 の根本なり。
 大師の文……三昧耶戒序なり、以
 下六三頁註參照。

切衆生本來平等に共に有せり。然りと雖も五障の覆蔽を被り、二妄の雲翳に依つて覺悟することを得ず。若し能く日月の輪光を觀じ、聲字の眞言を誦じて、三密の加持を發し、四印の妙用を揮へば則ち大日の光明廓として法界に周く、無明の障者忽に心海に歸し無明忽に明となり、毒藥乍に藥となる。五部三部の尊森羅として圓かに現じ、刹塵海滴の佛忽然として涌出したまふ。此の三昧に住するを祕密三摩地と名くと文。

問ふ、何んが觀じて能く此の菩提心を發すや。答

文に云く……祕密三昧耶佛威儀取
意か。

ふ。文に云く。それ無上菩提の心を發さんと欲はゞ、先づ深心を以て佛の法身を觀ぜよ。性海湛寂として生滅なし。衆生癡闇にして自ら覺るに由なし。諸佛如來、この輩を愍念し、大悲の浪を起して生死の海に流し、大教の網を張つて顯密の機を濟ひたまふ。然るに我れ等今教網に遇うて既に羅れり。應に彼岸近きことを知るべし。今度脫漏なば永く生死に留らん。當に深廣なる大菩提心を發すべし。誓願して一切の惡法を斷除し、誓願して最上の法門を修習し、誓願して一切の有情を度脫し、誓求して速に無上菩

六大……地水火風空識なり、宇宙間一切の有情非情はこの六大よりなる、而して前五大は胎藏界の理法身にして第六識大は金剛界の智法身なり、故に六大法身と言ふ。

提を證せん。謂ゆる菩提とは即ちこれ諸佛法身の六大、亦是れ衆生本覺の四曼なり。

問ふ。若し爾れば此の三摩地を修する者は幾くの時分を経て成就することを得るや。答ふ。若し相續修に據らば十二年を過ぎずして有相即ち成就し、無相も亦漸く現ぜん。

問ふ。若し爾れば唯此の觀を修して成佛するを得るや。答ふ。唯此の觀に依つて全く餘修なからんに、懈怠小機の者は順次往生の大願を遂げ、精進大機の者は現身成佛の悉地を得ん。何を以ての故に、一心

有相……眞言を唱へ或は觀法をなして菩提心を發すこと。
無相……行住坐臥自然に菩提心に住すること。

論……菩提心論なり。

に萬行を攝して行として行せざることなく、一觀に諸觀を含めて觀として觀せざることなし。故に大日經に云く。若し勢力の廣く饒益すること無くんば法に住して但菩提心を觀ぜよ。佛この中に萬行を具へて淨白純淨の法を満足すと説きたまへり。論に云く。若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺の位を證すと文。

(興教大師一期大要秘密集 發菩提心用心)

一三 深信の徳

悉地……成就と譯す、眞言の妙果
或はこれを得ることなり、これ
に世間的なる悉地(功驗利益)と
出世間の悉地(佛果)とあり。

經に説いて云く、取意、何なる心を發す者必ず悉地
を成就するや。謂く深信有る者能く悉地を得。何な
るを深信といふ。謂く久久く修行して法驗を得ずと
雖も疑の慮を生ぜず、退心を生ぜざるなり。此の如
くの人には必ず定んで悉地を成就す。或は本尊、行者
を試みんが爲の故に、或は諸天等その信心の淺深を
試みんが爲に暫く以て之を抑ふるが故に。或は宿障
重深なるが故に、暫く成ぜざるに似たりと雖も、冥

魔旬……魔障波旬、共に惡魔のこ
と。

に能く成就するを自ら知らざるが故に。或は魔旬妨
を成して暫く覆蔽するが故に、此の如く等の種種の
因縁あるが故に疑ひ怠るべからざるなり。

(興教大師 末代眞言行者用心)

觀

行

章

一四 月輪觀 (一)

肉搏……心臓なり、又眞實心即ち
自性清淨心を云ふ。

肉搏の上身質の中に

一の満月有り蓋しもつて玲瓏たり

明了潔白にして色紫紅を離れ

清淨無礙にして形玉琮の如し

舒れば法界に盈ち巻けば弧躬に收まる

火も灼くこと能はず水も融ずること能はず

體有にして有に非ず性空にして空に非ず

十方に周遍し三世に穹隆たり

穹隆……高く弓の如く曲ること。
天なり。

上佛聖に達し下兒童に亘る

迷へば苦海に沈み悟れば世雄と成る

貪瞋痴覆ひ戒定慧崇し

昇沈異なりと雖も本有は惟れ同じ

或は五智と爲り或は六通を作し

煩惱の闇を輝かし生死の夢を驚かす

三摩地をして普賢宮に至らしむ

五相具に備はり萬德併せて融ず

須臾も合掌すれば金剛の功を成じ

刹那も稽首すれば靜智蒙を開く

六通……六種の神通即ち天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神通、漏盡通なり。

普賢宮……普賢菩薩は菩提心の徳を司る、故に菩提心の意なり。

五相……五相成身なり、二八頁註参照。

薰習の日寛ければ結縁の門衆し

願はくは輪觀に乗じて速に樊籠を出でん

(興教大師 月輪觀頌)

樊籠……禽獸を容る、具、業煩惱に縛せらる世界を喻ふ。

一五 月輪觀 (二)

本尊の前心壇の上に

心月輪あり菩提心の體なり

萬法の能生不二の本源

諸佛の極祕法界の體性なり

行者端坐して身と心とを調へ

方便習學して能く知て觀行せよ

前に當つて面に對して高からず下からず

量一肘に等しうして圓滿具足せり

一肘……八一頁註参照。

形體團圓として其の色白淨なり

内外明徹にして潔白分明なり

自性清淨にして清涼寂靜なり

光明遍く照して明朗湛然たり

晴天に満月の圓明を見るが如くにして

眼を開き眼を閉ぢて久久く觀察せよ

目暫くも捨てずして當に之を徹見すべし

月即ちこれ心心即ちこれ月なり

月輪の外に更に心念無く

心念の自體は全く月輪に依る

異縁……他のものに心を懸けること。

唯月輪をのみ念じて異縁無からしめよ

一心一念にして更に餘念無し

一向専念にして堅固不動なれば

普賢宮に入り金剛定に住す

若し心散亂せば制して一處に止めよ

若し心沈没ば了了として分明なれ

空中の月の如く分明に現前せば

引いて胸中に置き心處に觀察せよ

倍心眼を以て亦當に觀見すべし

若し亦心定りて一處に住し已なば

引いて漸く廣ぜしめよ或は四尺の量

或は一丈の量或は二丈の量

若は一院に満ち若は一城に遍じて

各々分限を定めて次第に觀察すべし

心一處に住しなば轉じて久く住することなかれ

乃至倍增して三千世界に満て

極めて分明ならしめよ若し心疲極て

將に出觀せんと欲はゞかくの如く漸く略し

還つて本相に同じ一肘の量に觀じて

胸の内に置き已れ

(興教大師 月輪觀頌)

本相……初のすがたなり。

一六 阿字觀

夢幻泡影石火の輝

行住坐臥愚味の案

心開くべからず坐禪の床

心閉づべからず禪定の室

他よりも得ず自然智

自よりも得ず無師智

己心法界にして有無を離れ

明朗寂然として一物無し

自然智……本具にして本來圓滿せる智、如來の覺の本質を示す智にしてこれによつて不生の理を覺る、清淨本覺の智なり。
無師智……無師獨語の佛智にして、人によつて授けらるべきものに非ざる智なり。

無去無來にして去來を示し

生死本より無うして因縁を成ず

識大は無體にして太虚に融じ

隱顯自在なること水月の如し

凡聖一如にして迷悟を亡り

常住不變にして始終を絶つ

諸法任運にして造作にあらず

教外無相にして法義を唱ふ

佛祖傳へざれども法爾に備はり

心源空寂なれども金剛より堅し

任運……作爲を加へず自然なるなり。
法爾……法の自性として自然に然かあること。

我字の空劍……我は本不生大空の理を表す。

我字の智水……我字は水大を表し、又金剛界智法身を表す。

我字の命風……我字は風大を表し、風は命息をなす故に命風と云ひしなり。

本分の心蓮……本具の自性清淨心なり。

我字の空劍生死を斬り

我字の智水諸法を成ず

我字の命風太虚に遍く

本分の心蓮自然に開く

(興教大師 阿字觀)

一七 無相觀

初觀の時には月に如似れども

周遍の後には更に方圓なし

久久く觀を作して觀習成就する時は

延促を須ひずして唯明朗のみを見る

更に一物無く身心を見ず

萬法不生にして猶し虚空の如し

無相無念なれば假りに虚空と説く

空の相なりと謂ふには非ず無分別に住するなり

無分別觀堅立不動にして

一切の妄想分別を遠離せよ

一切の相状は悉皆空寂なり

心念尙ほ空なり境界豈に有ならんや

若し夢中に現ずとも亦相を取らざれ

設ひ諸佛を見るも亦相を取らざれ

若し無相に入りぬれば即ち有相にあらず

即ち無相にあらず空にあらず有にあらず

法は二相なし心言兩つながら亡ゆ

是れ即ち阿字本不生の理

相を取る……相に執着するなり。

第一義空なり不二中道なり

法界圓明なり心月滿輪なり

(興教大師 無相觀)

諷

詠

章

一八 十 喻

如幻の喩を詠ず

吾れ諸法を觀ずるに譬へば幻の如し

總て是れ衆縁の合成する所なり

一箇の無明と諸の行業と

中にあらず外にあらず凡情を惑はす

三種世間能所造

十方法界水蓮城

空に非ず有に非ず中道を越えたり

無明……諸の煩惱業の根本となる
迷闇なる意欲。

三種世間……六一頁「三世間の身」
註参照。

能所造……造るものと造らるゝもの。

水蓮城……佛の世界なる蓮華藏世界を云ふ。

三諦……天台にて諸法を觀察して
空、假、中の三諦(眞理)を立て
この三諦の相即關係を説く。

秋水の桂光……水中の月なり。

楚澤の行雲……楚の襄王が宋玉と
共に雲夢の臺に遊びし時雲氣の
朝には朝雲、暮には行雨となり
變化窮り無きを見たりと云ふ故
事。

洛川の廻雪……曹子建が洛川をわ
たる時楚王と宋玉のことを思ひ
洛川の神女の賦を作る、その中
に「颯飄たること流風の雪を廻
らす若し」とあり。

三諦宛然として像名を離れたり

春園の桃李は肉眼を眩かす

秋水の桂光は幾くか嬰を酔しむ

楚澤の行雲は無にして復有なり

洛川の廻雪は重うして還つて輕し

封著して狂迷すれば三界熾んなり

能く觀じて取らざれば法身清し

拙いかな迷者孰れか此を觀ずる

超越して阿字の營に還歸せよ

陽燄の喩を詠ず

遅々たる春の日風光動く

陽燄紛々として曠野に飛ぶ

體舉つて空々にして所有なし

狂兒迷溺して遂に歸らんことを忘る

遠くしては有に似たれども近くしては物なし

走馬流川何れの處にか依る

妄想談議して假名起る

丈夫美女城園に満てり

男と謂ひ女と謂ふ是れ迷へる思なり

覺者と賢人と見るは則ち非なり

走馬流川……陽焰が走馬流川に見
ゆるなり。

妄想談議……陽焰に走馬流水を見
るが如く本來空の法中に妄想に
よりにて種々の法を立つるなり。

五蘊……一九頁註参照。
 四魔……煩惱魔、五蘊魔、死魔、
 天魔なり。
 夷希……魔佛の二相見開の境を越
 し共に不可得なりとの意。
 瑜伽……七五頁註「秘密瑜伽」參
 照。
 大空三昧……空にも執せず有にも
 執せず、空も不空も畢竟無相に
 して而も一切の相を具すと照見
 する三昧なり。
 妃……定の別名なり。

五蘊皆空は眞實の法

四魔と佛と亦夷希たり

瑜伽の境界は特に奇異なり

法界の炎光自から相暉く

慢ずることなかれ欺くことなかれ是れ假の物

大空三昧は是れ吾が妃なり

如夢の喩を詠ず

一念の眠の中に千萬の夢あり

乍に娛み乍に苦んで籌ること能はず

人間と地獄と天閣と

一たびは哭し一たびは歌つて幾許の愁ひぞ

睡の裏には實眞にして覺むれば見えず

還つて知んぬ夢の事は虚狂にして憂ひなることを

無明の暗室の長眠の客

世の中に處て多かるものは憂ひなり

悉地の樂宮も愛し取ることなかれ

有中の牢獄には留るべからず

剛柔氣聚れば浮生出づ

地水縁窮まれば死して休するが若し

輪位と王侯と卿相と

悉地の樂宮……瑜伽の觀行等に於
 いて佛の像を見或は淨土に遊ぶ
 等の不思議を見るも夢喩によつ
 てこれを觀じ執着すべからず。
 (九六頁註参照)

剛柔氣……陰陽の二氣なり。

地水……地水火風の四大を表す、
人體の要素なり。

春は榮え秋は落つ、逝くこと流るゝが如し
深く修して觀察すれば原底を得

大日圓々として萬徳周し

鏡中の像の喩を詠ず

長者の樓の中の圓鏡の影

秦王の臺の上の方丈の相

知らず何れの處よりか忽に來去する

これは是れ因縁所生の狀なり

有に非ず無に非ず言説を離れたり

世人の思慮は籌量を絶つ

秦王の臺の上云々……秦の始皇宮
人を照す不思議なる方鏡を藏せ
しと云ふ。方丈の相とは方鏡に
現ぜし姿なり。

心神……心のこと、心性靈妙なる
故に心神と言ふ。

攝念……禪定なり。

蘭室……佛堂なり。

三密寥寂……行者の三密が本尊の
三密と相應感應すること。

異詳……便蒙(鈔)に詳は況に作る
べし、況は味なりとす。

言ふことなかれ自作と共と他起と

外道邪人は虚妄に繞はる

心神と衆生と同異にあらず

因縁にして顯るゝこと猶し響の如し

閑房に攝念して無明斷え

蘭室に香を焚いて讚の響暢ぶ

三密寥寂として死灰に同じ

諸尊感應して忽に來り訪ふ

喜ぶことなかれ嗔ることなかれ是れ法界なり

法界と心と異詳なし

乾闥婆城………威氣樓なり。

乾闥婆城の喩を詠ず

海中嚴麗にして城櫓を見る

走馬行人南北東す

愚者は乍に觀て實ありとす

智人は能く假にして空なりと識る

天堂と佛閣と人間の殿と

有に似て還て無なること此れと同じ

咲ひつ可し嬰兒愛し取ることなかれ

能く觀じて早く眞如の宮に住すべし

響の喩を詠ず

口中峽谷空堂の裏

風氣相撃て聲響起る

若は愚若は智聽くこと同じからず

或は瞋り或は喜ぶ相似たるに匪ず

因縁を尋ね覓むれば曾て無性なり

不生不滅にして終始なし

一心に安住して分別することなかれ

内風外風吾が耳を誑かす

水月の喩を詠ず

桂影團々として寥廓に飛ぶ

内風………有情の聲。
外風………非情の聲。

桂影………月なり。
團々………圓きさま。
寥廓………大虚空なり。

千河萬器各センガバンキオノノヒカリ 暉を分つワカ

法身寂々として大空に住すホウシンジヤククダイクウチユウ

諸趣の衆生互に入歸すシヨシユシユジヤウタガヒニツキ

水中の圓鏡は是れ偽れる物スキチユウエンキヤウコレイツワモノ

身上の吾我も亦復非なりシンジヤウゴガマタマタヒ

如々不動にして人のために説きニョクフドウトヒト

兼て如來大悲の衣を著よカネニョライダイヒコロモキ

如泡の喩を詠ずニョハウタトヘエイ

天雨濛々として天上より來るテンウモウクテンジヤウキタ

水泡種々にして水中に開くスキハウシユクスキチユウヒラ

乍に生じ乍に滅して水を離れずタチマチシヤウタチマチイッ

自に求め他に求むるに自業裁すジモトタモトジゴフサイ

即心の變化不思議なりソクシンヘンゲフシシギ

心佛これを作す怪み猜ふことなかれシンブツアヤシウタガ

萬法自心本一體マンボフジシンモトイツタイ

此の義を知らず尤も哀む可しコギシシモットアハレベ

虚空華の喩を詠ずコクウゲタトヘエイ

空華灼々として何の實かあるクウゲシヤククナンジツ

無色無形にして但し名のみありムシキムギヤウタマナ

染淨は元より動ずること能はずゼンジヤウモトドウアタ

圓鏡……月なり。

自業裁す……自業の裁成(造作)する所なりの意。

虚空華……眼病の者が空中に華を見るなり。灼々……華の盛なるさま。

雲霧暄晴……暄は曇らし暗くすること、煩惱が清淨の本性を汚すことを喻ふ。

六情……眼・耳・鼻・舌・身・意の六識なり。外典にて言へば喜・怒・哀・樂・愛・忿なり。
旋火輪……火の燃えるものを手にとり急に廻轉する時生ずる火輪なり。

雲霧暄晴するを濁清と名く

實相如々にして一味の法なり

迷人妄りに三界の城を見る

四魔三毒は空が幻なり

怖るゝことなく驚くことなうして六情を除け

旋火輪の喩を詠ず

火輪手に随つて方と圓となり

種々の變形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉し

無邊の法義これによつて宣ぶ

一九 入山の興

師……弘法大師をさす。
崎嶇……險しきさま。

君……良相公、即ち良峯朝臣安世をさす。

問ふ。師何の意あつてか深寒に入る。深嶽崎嶇と

してただ安からず。上るにも苦み、下る時にも難

む。山神木魅これを審とせり。君見ずや君見ずや、

京城の御苑の桃李の紅なるを。灼々芬々として顔色

同じ。一たびは雨に開け、一たびは風に散る。上に

飄り下に飄つて園中に落つ。春女群り來つて一たび

手に折り。春鴛翔り集つて啄んで空に飛ぶ。君見ず

や君見ずや、王城の城の裏の神泉の水、一たびは沸

き、一たびは流れて速なること相似たり。前に沸き後へに流れて幾許く千ぞ。流れゆき流れゆいて深淵に入る。深淵に入て轉々として去る。何の日、何時にか更に竭きん。君見ずや君見ずや。九州八島無量の人、古よりこのかた無常の身なり。堯舜禹湯と桀紂と、八元十亂と五臣と、西嬭媼母支離の體と、誰か能く萬年の春を保ち得たる。貴き人も賤しき人も摠て死に去んぬ。死に去り死に去つて灰塵と作んぬ。歌堂舞閣は野狐の里、夢の如く泡の如し電影の賓。君知るやいなや、君知るやいなや。人此の如し、

九州八島……九州は支那、八島は日本なり。
 八元……史記に曰く、「高辛氏に才子八人あり、世に之を八元と謂ふ」と、元とは善の意なり。
 十亂……亂とは治むる義、武王に周公旦、太公望等亂(治)臣十人ありしと言ふ。
 五臣……舜に禹、稷等の五臣あり、天下治まると。
 西嬭……西施、毛嬭なり、西施は越の女、毛嬭は武王の后共に美人なり。
 媼母……黃帝の女にして醜婦なり。
 支離……支離疏、莊子に醜男の典型として説く。

汝何ぞ長からん。朝夕に思ひ思へば腸を斷つに堪へたり。汝は日西山に半ば死るの士なり。汝は年半に過ぎて尸の起てるが如し。住らんや住らんや一も益無し。行きね行きね止るべからず。去來去來大空の師、住ること莫れ住ること莫れ乳海の子。南山の松石は看れども厭ず。南嶽の清流は憐むこと已まず。浮華名利の毒に慢ること莫れ、三界火宅の裏に焼るゝこと莫れ。斗敷して早く法身の里に入れ。

大空の師……阿字大空を觀する師、眞言行者なり。
 乳海の子……佛子の乳水を味ふの人、眞言行者なり。

斗敷……頭陀の謔語五十四頁註參照。

(入山興)

110 山中の樂

納衣……出家が修行の時着る法衣なり。

摩竭……印度の摩竭陀國。
靈鷲……靈鷲山なり。
臺嶽……五台山なり。
曼殊……文殊菩薩。

天子は頭を剃つて云々……天子が寶位を捨て、出家すること。耶孃は愛を割いて云々……耶孃とは父母、能仁とは釋迦佛なり、父母が親愛を割きてその子を出家せしむるを言ふ。

山中に何の樂かある。遂に爾永く歸ることを忘れたり。一の祕典百の納衣、雨に濕ひ雲に霑うて塵と與に飛ぶ。徒に飢ゑ、徒に死して何の益かある。何れの師か此の事を以て非なりとせん。君見ずや、君聽かずや、摩竭の鷲峰は釋迦の居、支那の臺嶽は曼殊の廬なり。我をば息惡修善の人と名づく。法界を家となして恩を報ずる賓なり。天子は頭を剃て佛駄に獻じ、耶孃は愛を割いて能仁に奉る。家もなく國

澗水……谷川の水なり。

紺幕……碧天を言ふ。

白帳……白雲なり。

八部……神力を有する鬼神に八部

もなし。郷屬を離れたり。子に非ず臣に非ず子として貧に安んず。澗水一杯朝に命を支へ、山霞一咽夕に神を谷ふ。懸蘿細草體を覆ふに堪へたり。荆葉杉皮是れ我が茵なり。意ある天公紺幕垂れたり。龍王篤信にして白帳陳ねたり。山鳥時に來つて歌つて一たび奏す。山猿軽く跳んで伎倫に絶れたり。春の華、秋の菊笑んで我に向ふ。曉月朝風情塵を洗ふ。一身の三密は塵滴に過ぎたり。十方法界の身に奉獻す。一片の香煙經一口。菩提の妙果以て因とす。時華一掬讚一句、頭面一禮して丹宸に報ず。八部恭々とし

衆あり、即ち天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人なり。
 四生……二六頁註參照。
 慧刀揮斫して云々……智慧の刃を以つて煩惱の結縛を断じ盡すこと宛かも技神にせまれる料理人が利刀をもつて牛を料理し牛の影もなきに至らしむるが如しと喩へたるなり。
 三劫……三妄と同じ、二六頁註參照。
 百非……一切の妄見を否定するなり、百は大数を表す。
 圓光……圓明なる佛性、菩提心の光なり。

一三四
 て法水に潤ひ、ホフスキ ウルホ 四生念々に各眞を證せん。シシヤウネンク オノノクシン ショウ 慧刀揮斫して全き牛なし。マツタ ウシ 智火纒に放つて灰留らず。チクワワヅカ ハナ 不滅不生にして三劫を越えたり。シヤウ サンゴフ コ 四魔百非憂ふるに足らず。シマヒヤクヒ ウレ 大虚寥廓として圓光遍し。タイコレウクワク エンクワウアマネ 寂寞無爲にして樂みなり。ジャクバクム キ タノシ やいなや。

(山中有何樂)

二一 大仙を慕ふ

高山に風起ち易く カウゼン カゼタ ヤス
 深海水量り難し シンカイミツハカ ガタ
 空際は人の察すること無く クウサイ ヒト サツ ナ
 法身のみ獨り能く詳にす ホウシン ヒト ヨ ツマビラカ
 鳧鶴誰か理に非ざる フクワクイツレ リ アラ
 蠃龜詎ぞ曄はれ叵らん ギ キナン アラ ガタカ
 葉公は假借を珍とし セウコウ ケシヤク チン
 秦鏡は眞相を照す シンケイ シンサウ テラ

鳧鶴誰か理に云々……鳧はかものり、鶴の脛短きも鶴の脛長きも自然の理なり、法界の相なり、變ゆべからず。
 蠃龜詎ぞ曄はれ云々……蠃は蟻なり、符子に説く故事に群蟻が山を冠とする大龜を見てこれ我等の穀粒を散けると異ならずと言へることあり。至つて大なるもの至つて小なるものそれ、法界の相にして法身の徳を譬はさざるなしとの意。
 葉公は假借を云々……葉公は龍を好み龍の圖像のみを室に置きしが眞の龍が來りし時怖れ逃げたりとの故事、これ眞を好まずして假を好むものにして凡夫の妄境に執着するを喩ふ。
 秦鏡は眞相を云々……秦の始皇は宮人の心中までも映す不思議なる方鏡を有せりと云ふ。これ聖者が眞相を見ることを喩ふ。

蘇合……蘇合香、極めて芳香を有す。

蚌類……蚌を喰ふ虫なり。

仁恤は麒麟に異なり……麒麟は王者至仁なる時出づ。仁恤の至仁に異なるを言ふなり。

狡子……獅子なり。
麋麋……共に鹿の一種、麋は大鹿、麋は小鹿なりと。

睚眦……怒るさまなり。

噓談……嘲げしく論議するなり。
疔瘡……共にきづなり。

白黒を染め……白は善、黒は悪なり、白を黒とし、黒を白とする如く倭人が善悪を紛亂するを言ふ。

蜂蟻……蜂とさそり、心中に悪心を含むを喻ふ。

金と石とを銷せども……衆口の毀謗は金石をも銷かすこと。

蒿蓬……艾に似たる雜草。
墟壠……廢墟や塚。

蘭蕙……蕙も蘭の一種共に芳香あり。

鴉の目は唯腐たるを看る

狗の心は穢しき香に耽る

人みな蘇合を美みす

愛縛は蜚蜋に似たり

仁恤は麒麟に異なり

迷方は犬羊に似たり

能く言ふこと鸚鵡の若し

説が如くなれども賢良を避る

豺狼は麋鹿を逐ひ

狡子は麋麋を嚼ふ

睚眦して寒暑に能へ

噓談して疔瘡を受く

營々として白黒を染め

讚毀して灾殃を織る

吐の裏には蜂蟻滿つれども

身の上には虎豹を莊る

能く金と石とを銷せども

誰か願て剛強を誠めん

蒿蓬は墟壠に聚り

蘭蕙は山陽に鬱なり

曠舒……日月、光陰なり。

曠舒矢の如くに運り

四節人をして僵れしむ

柳葉は春の雨に開け

菊華は秋の霜に索む

窮蟬野外に鳴き

蟋蟀帳の中に傷む

松柏は南嶺に摧け

北邙に白楊を散ず

一身獨り生歿す

電影是れ無常なり

北邙……山の名なり、貴人名士の墳墓多きを以つて名あり。

鶴髮……白髮なり。禎祥……祥福なり。

鴻燕更る來り去り

紅桃昔の芳りを落す

華容年の賊に偷まれ

鶴髮禎祥ならず

古の人今見えず

今の人那ぞ長きことを得ん

熱を風巖の上に避り

涼を瀑の飛漿に逐ふ

薜蘿の服に狂歌し

松石の房に吟醉す

薜蘿……つたかづらなり。

澗中……谷間なり。

白朮……藥草の名、消化をよくす。

黃精……藥草にして肌肉を肥えしめる。

子晉……周の靈王の太子、箒を好み、白鶴に乗じて天に上れりと言ふ。

漢……天のこと。
伯夷……周の武王が殷の紂王を討ちし時に反するものとして弟叔齊と共に周の粟を食はずとて首陽山に隠れたり。
老聃は一氣を守り……老子なり、老子は混沌未分の一氣を守り無爲自然を貴ぶ。
許は貫三の望を脱る……許は許由なり、堯が天下を譲らんとせしを譲れて陽箕山の下に耕す貫三とは王のこと、王の字は三の中を貫く故なり。

鸞鳳……共に神異の瑞鳥にして梧桐に非ざれば栖まざると云ふ。

崑嶽……崑崙山なり、北海にあり岸を去ること十三萬里、高さ三萬六千里なり、西王母の治むる所と云ふ。

蓬萊……蓬萊山は東海にあり、高さ一千里、周廻五千里なり、太山真人の居る所なりと言ふ。

名賓は心實を害す……名は實の賓なる故に名のこと、名賓と云ふ。世間の仙と佛(大仙)とは名同じきも實全く異なる故に心實を害すと言ふ。

渴しては澗中の水を飲み

飽まで煙霞の糧を喫ふ

白朮は心胃を調へ

黃精は骨肪に填つ

錦霞は山に爛る幄

雲幕は天に滿て張れり

子晉は漢を凌で舉り

伯夷は周の梁を絶つ

老聃は一氣を守り

許は貫三の望を脱る

鸞鳳は梧桐に集り

大鵬は風床に臥す

崑嶽は右方の廡

蓬萊は左邊の廡

名賓は心實を害す

忽に飛龍に駕して翔る

飛龍は何れの處にか遊ぶ

寥廓たる無塵の方

無塵は寶珠の閣

堅固金剛の牆なり

遮那……大日如來なり。

眷屬は猶し雨の如し

遮那は中央に坐す

遮那は阿誰號ぞ

本是れ我が心王なり

三密刹土に遍し

虚空に道場を嚴る

山毫溟墨を點ず

乾坤は經籍の箱なり

萬象一點に含み

六塵縑緗に閱ぶ

山毫溟墨……大山を筆とし大海を
墨とするなり。

乾坤は經籍の箱……天を蓋とし地
を函としその中の一切のものは
即ち法然自然の經卷なり。

一點……阿字の空點。

六塵縑緗……縑緗は書物のこと、
六塵のある所即ち書物なりとの
意。六塵は二二頁註参照。

行藏は鐘谷に任せたり……出で
行ふも退き隠るも鐘鳴の幽谷に響
くが如く自然に感應し私無しと
の意。
吐納鋒鋦を挫く……吐納は設默、
鋒鋦はほこさきなり、設默して
煩惱の魔劍を摧くなり。
三千……三千大千世界、廣大なる
宇宙なり。

行藏は鐘谷に任せたり

吐納鋒鋦を挫く

三千は行歩に隘く

江海は一嘗に少し

壽命は始め終り無し

降年豈に限壇あらんや

光明法界に満てり

一字津梁を務む

景行なほ仰止すべし

齊からんと思はゞ自ら東裝せよ

降年……壽命なり。

一字津梁を務む……一の阿字は本
不生にして一切の意義功德を有
するの意、梁は橋なり。
景行……大道なり、大仙の悟境を
言ふ。

萋々……草の盛んなるさま、煩惱の盛んなるを喻ふ。

澹泊……私慾なく安靜なるさま、徳行……行遊すること。

飛雲幾くか生滅する

靄々として空く飛揚す

愛に纏るゝこと葛の旋るが如し

萋々として山谷に昌なり

誰か如かん禪室を閉ぢて

澹泊として亦徬徨せんには

日月空水を光す

風塵妨ぐる所なし

是非同じく説法なり

人我俱に消亡す

定慧心海に澄しむれば

無縁にして毎に湯々たり

老鷄同く黒色なり

玉鼠號相防る

人の心は我心に非ず

何ぞ人の腸を見ることを得ん

難角天眼なければ

抽で、一の文章を示す

湯々……水の盛んに流れるさま、無縁の大悲の水湯々として恒に湛ふとの意。
老鷄同じく黒色なり……鷄は鶉なり、群鷄は同じく黒色にして其の異を知り難しの意、次の語と同じ意を喻ふ。
玉鼠號相防る……鄙人は玉の未だ磨かざるを璞と言ひ、周人は鼠の死して未だ乾かざるを璞と云ふ、同じく璞と言へども其の實全く異なる。世間の仙と大仙(佛)とも同じく其の實異なるも名相同じき故に辨別し難しとの意なり。
難角……菩薩の五十二位の初位を難角地と言ふ、修行に九萬劫を要し、成就すること難角の如く少なき故に云ふ。
天眼……人の心を知る神通なり。

(遊山慕仙詩)

三三 自心の宮を觀ぜよ

元々……養生なり、百姓人民。

四蛇……人の身體を作る要素たる
地水火風を喻ふ。

撥……撥無、否定すること。
蕩逸……放逸、氣まゝにしてしま
りなきなり。
東に打たれ云々……畜生の生を受
けたるものゝ状を言ふ。

河に臨んで云々……飢鬼道の状を

哀哀たり末世の諸の元々、犇犇にして聖者の言を
屑んぜず。久く無明の酒に酔て本覺の源を知らず。
長く三界の夢に眠て永く四蛇の原を愛す。身と口と
心とに十惡を行ず。不忠不孝にして罪業繁し。因果
を撥して罪福を無す。蕩逸昏迷にして口腹を營む。
生れゆき死にゆいて笑つて哭す。東に打たれ、北に
打たるゝ、摠て是の由なり。業障は重く、功德は輕
し。河に臨んで水を見れば火還つて盈てり。佛身の

甘澤……甘露なり。

雄鷄……焦げ濁くなり。
亢陽……旱魃なり。

三教……儒道佛の三教なり。
九流……儒教・道教・陰陽道・法家・
名家・墨家・縱橫家・雜家・農家な
り。
四量……無量の衆生を化益し無量
の福を引く四無量心、慈、悲、
喜、捨（無觀を捨す）なり。

裡に地獄を見、七寶の上に玉を看ず。甘澤孜孜たれ
ども火四もに起る。之を燒き之を爛らすこと稻と粟
となり、山河雄鷄して禽魚死し。朝野亢陽して淚相
續ぐ。我が皇願を垂れて人の爲に出でたまふ。且は
智、且は仁あつて八州に臨めり。三教九流一心に裏
み、四量六度萬劫に修す。人のために咎を引て樓觀
を避り、物のために飢を減して日夕に憂ふ。寺々に
僧を進めて妙法を開き、山山に使を馳せて禱祈する
こと周し。老僧讀誦して微雲起り、禪客持觀して雨
の足優なり。甘露の乳水、醍醐の油、濛々漫々とし

桂嶺……天台山なり、今は高雄山に擬す。
 禾田……稻田なり。
 沃澮……沃は賦に作るべし、賦澮とは田の間の溝なり。
 陂池……ため池なり。

種穡……種は早稻、種は晚稻なり。
 瓦々……稻のよく生成せるさま。
 苗稼……稻の苗なり。
 東臯……東(春)の水田。
 鷗々……大鼓を打つ聲なり。
 千箱と萬庾……箱も庾も米倉なり、多くの倉の意なり。
 坻の如く京の如く……坻は水中の高地即ち島、京は高き丘なり。
 一唾に能く云々……佛藏經に「劫火起る時菩薩一唾し火即ち滅し世界即ち成る」と云ふ。
 六道……地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天なり。
 好心に通ず……善心を以て佛語を寄す通ずる意なり。

自心の宮……自身所具の淨善菩提心なり。
 三身……佛の三身即ち法身、報身、應身なり。
 五智……三七頁註参照。
 灌頂……密教の阿闍梨より秘法を印可傳授さるゝ儀式。

て山谷に流る。桂嶺の瀑布幾くか兎を溺す。禾田の沃澮牛を没するに堪へたり。青々たる草木珠のごとくに葉を莊り、浩々たる陂池湛へて瑠の如し。農夫また愁ふることなかれ、早く看よ、稔種苗老たりや否や、南畝瓦々として苗稼緑なり。東臯鷗々として謳鼓鳩る。先づ知んぬ、千箱と萬庾と坻の如く、京の如く、また丘に似たり。妙なるかな法の威説く可らず。幸なるかな帝の力籌ること能はず。一唾に能く百界の火を銷し、一朝に能く萬人の愁を滅す。言を寄す、六道無明の客。我佛の言を以て好心に通

す。男女若し能く一字を持せば朝々一ばら自心の宮を觀ぜよ。自心はまた是れ三身の土なり。五智の莊嚴本より豊なり。知らんと欲はば先づ灌頂の法に入れ。纔に入て便ち持すれば薩埵と同じ。天食天衣自然に雨り。無爲無事にして帝功を忘れん。

(喜雨歌)

法

語

篇

佛

光

品

一

佛心は慈と悲となり、大慈は則ち樂を與へ、大悲は則ち苦を抜く
拔苦は輕重を問ふことなく、與樂は親疎を論ぜず。

(性靈集六)

二

如來は實に平等にして悲心普からずといふことなく、善惡悉く皆
憐みたまふ。

(宗祕論)

三

諸佛威護して一子の愛あり、何んぞ人間の難を惆悵チウチヤウすることを須モテ
ひん。

(性靈集三)

四

法界を而も體とし、虚空を以て佛心と作す。

(宗祕論)

五

越コトに奇仁アヤシキヒトみます之を没度ボダと號ナツく、身は塵刹に遍く、心は大虚に等し、談吐軌儀を失せず、思心規矩を越ゆることなし。(性靈集七)

六

没駄ボダの力以て爲さざる所なし、これを憑みこれを仰げば怨親猶し子のごとし、神通縁あり悲願極りなし、利樂拔濟、身の倦むことを憚らず、汪汪たる徳、言絶コトバえ思断オモヒえたり。(性靈集七)

七

智の無邊なるを佛陀と號し、覺の無上なるを調御テウゴと名く、智無邊

なるが故に知らざる所なく、覺無上なるが故に方便測り難し、故に能く種種の法門を以て長夜を攝化セツケしたまふ。(御請來錄)

八

眞如如智は慈悲を本とし、自覺覺他は度生ユウを用とす、心は大虚に遍じて谷の如くに響き、聲は洪音を鞞ツんで鐘の如くに應ず、利見攝引思絶オモヒえ言断コトバえたり。(性靈集七)

九

能く一時に普く法界の衆生に應じ、妙に根宜カナに合ツクひ曲さに佛事を成ず、則ち知んぬ如來の智力は必ず一念に於て普く群機の本末因縁を墮み覽て究竟無碍なり。(大日經開題)

一〇

佛とは梵語の略なり、具には沒駄と云ひ翻じて覺者と云ふ、覺と言ふは不眠を覺と名け開敷を義とす、又常明の故に、照了の故に、如實知見の故に。

(大日經開題)

一一

佛とは具には沒駄と云ふ、是れ正覺正知の義なり、實の如く過去未來現在の諸の衆生數非衆生數常無常等の一切の諸法を知つて明了に覺知するが故に佛と稱す。

(大日經開題)

一二

一切の賢聖、一切の凡夫に各々分覺あり、然れども未だ究竟せず、

如來は兩覺圓滿し洞達するが故に大覺と曰ふ。

(大日經開題)

一三

悟れる者をば大覺と號し、迷へる者をば衆生と名く、衆生癡暗にして自ら覺るに由なし、如來加持して其の歸趣を示したまふ。

(聲字義)

一四

衆生狂迷して本宅を知らず。三趣に沈淪し、四生に^{リヤウヒヤウ}躑躅す。苦源を知らざれば還本に^{ゴ、ロ}心なし。聖父其のかくの如くなるを愍んで其の歸路を示す。

(十住心論一)

一五

生死の長夜は惠日を假かりて以て照朗し、衆生の無歸は救世に依て酬
ふることを得。
(性靈集八)

一六

本有の佛性ありと雖も、必ず佛の驚覺を待つて乃すなはち能くこれを悟
る。
(大日經開題)

一七

狂毒自ら解せず醫王能く治す、摩尼自ら寶にあらず工人能く瑩ミカく、
いはゆる醫王と工人と豈に異人ならんや、我が大師薄伽梵バクガボン其の人
なり。
(寶鑰上)

一八

如來の徳は萬種を具せり、一一の徳は即ち一法門の主なり、彼の
一一の身より機根量に随つて種種の法を説いて衆生を度脱したま
ふ。
(寶鑰上)

一九

人の心には高下あれども佛の道には高下なし。
(一切經開題)

二〇

衆生の心清淨なれば則ち佛を見、若し心不淨なれば則ち佛を見ず。
(二教論下)

二一

如來は即ち是れ本心なり、一切の妄念は皆本心より生ず、本心は

主、妄念は客なり、本心を菩提心と名け、または佛心と名け、または道心と名く、三世の觀を作すと雖も、また常に自性を見るには及ばず、常に自性を見る者は即ち常に佛を見る。

(一切經開題)

二二

行住坐臥一切の時の中に於て、常に本性を見るを即ち有佛とし、また見佛と名く、若し一念も妄心を起さば、即ち餓鬼畜生地獄を見て三途サンツに受苦す、若し一切衆生の性と自性と無別なりと見れば、即ち一切處皆是れ佛なり。

(一切經開題)

二三

心に妄念無うして六塵に染せざれば、佛は即ち常に心に在キマす、萬

法の主となるが故に心王と名く、法界を國とし色身を舍イとす、今既に人身を受得すれば心王は中に處チるが故に名けて舍とす、これを佛の止住の處と名く、迷へば即ち濁惡の處、悟れば即ち清淨の處にして無染の境なり、また淨土と名く。

(一切經開題)

二四

心靜まれば如來を見たてまつること、鏡に明妙を貪るに似たり。

(宗祕論)

二五

法身は常に光明を放つて、常に說法したまへども、衆生無量劫の罪垢厚重なることあつて、見ず聞かざること、明鏡淨水の面を照

すときは則ち見、垢翳不淨なるときは則ち見る所なきが如し。

(二教論下)

二六

毗盧遮那とは或は日の別名と云ふ、除暗遍照を義とす、或は光明遍照と云ひ或は高顯廣博と説く、並びに皆其の義を得たり。

(大日經開題)

二七

毗盧遮那とは光明遍照の義なり、一燈一室に遍じて暗を除き、一日一天に遍じて黒を奪ふ、然れば則ち遍照の名諸物に遍ず。

(大日經開題)

二八

世間の日は則ち方分あり、光其の外を照すときは内に及ぶこと能はず、明一邊に在つて一邊に至らず、また唯だ晝のみ在つて夜を燭さず、如來智慧の日光は則ちかくの如くにはあらず、一切處に遍じて大照明を作す、内外方處晝夜の別あることなし。(大日經開題)

二九

日閻浮提を行くに一切の卉木叢林其の性分に随つて各々增長することをおえ、世間の衆務之に因つて成ずることを得、如來の日光もまた復かくの如し、法界に遍じて平等に無量の衆生の種種の善根を開發したまふ、世出世間殊勝の事業これに由つて成辦すること